東京国立近代美術館工芸館移転整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

金沢市

金沢城下町遺跡（本多氏屋敷跡地区）

２０２０

石　川　県　教　育　委　員　会

（公財）石川県埋蔵文化財センター

金沢城下町遺跡（本多氏屋敷跡地区）

かなざわじょうかまちいせき　ほんだしやしきあとちく

2020

石川県教育委員会

（公財）石川県埋蔵文化財センター

例　　言

1　本遺跡は金沢城下町遺跡（本多氏屋敷跡地区）の発掘調査報告書である。

2　遺跡の所在地は石川県金沢市出羽町地内である。

3　調査原因は東京国立近代美術館工芸館移転整備事業で、同事業を所管する石川県企画振興部企画課が、石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。

4　調査は、公益財団法人石川県埋蔵文化財センターが石川県教育委員会から委託を受けて、平成29（2017）年度に現地調査を、平成30（2018）年度に出土品整理を、令和元（2019）年度に報告書原稿作成および報告書刊行を実施した。

5　調査に係る費用は石川県企画振興部企画課が負担した。

6　現地調査の期間・面積・担当は下記のとおりである。

期　間　平成29年10月16日～同年12月26日

面　積　1,180㎡

担　当　調査部特定事業調査グループ　舘　直人（専門員）、林　大智（専門員）

調査部県関係調査グループ　澤辺利明（主幹）、佐々木華子（嘱託調査員）

7　出土品整理は平成30年度に国関係調査グループが担当した。

8　報告書原稿作成・編集・刊行は令和元年度に調査部県関係調査グループが担当した。

原稿作成は第２章を山内花緒（調査部国関係グループ主事）が、他を澤辺（調査部特定事業調査グループリーダー）が担当した。編集は澤辺が行った。

9　調査には金沢市埋蔵文化財センターの協力を得た。

10　調査に関する記録と出土品は石川県埋蔵文化財センターで保管している。

11　本書についての凡例は下記のとおりである。

⑴　方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標Ⅶ系に準拠した。

⑵　水平基準は海抜高であり、T.P.（東京湾平均海面標高）による。

⑶　遺構の名称は、下記の略記号に算用数字を付して表記した。

SA：塀・柵、SB：掘立柱建物、SE：井戸、SK：土坑、P：柱穴・小穴、SX：その他・不明遺構

⑷　遺物の報告番号は挿図、出土遺物観察表、遺物図版で共通番号を用いた。

⑸　出土遺物観察表には出土遺構、遺物種類、器種等のほか、出土品整理時の図化番号を記載した。

目　　次

第１章　調査の経緯と経過 …… 1
　第１節　調 査 の 経 緯 …… 1
　第２節　現地調査、出土品整理、報告書作成･刊行の経過 …… 1

第２章　遺跡の位置と環境 …… 3
　第１節　地 理 的 環 境 …… 3
　第２節　歴 史 的 環 境 …… 3

第３章　調 査 の 結 果 …… 7
　第１節　調 査 の 概 要 …… 7
　第２節　検出遺構・遺物 …… 7
　第３節　ま と め …… 19

写　真　図　版

報 告 書 抄 録

挿図目次

第１図　調査区の位置 …… 2
第２図　工事計画と調査区の位置 …… 2
第３図　遺跡の位置 …… 3
第４図　金沢城下町遺跡と周辺の近世遺跡 …… 5
第５図　調査区･グリッド配置図 …… 8
第６図　調査区全体図 …… 8
第７図　調査区壁断面採図位置案内図 …… 9
第８図　A区南西（B･C･F）、C区南西壁断面図（H･N･P･U） …… 9
第９図　調査区南東壁断面図（A･V･L･L2･M） …… 10
第10図　調査区北東･北西壁断面図（D･E･E2･I） …… 11
第11図　Ｃ区調査区壁断面図（G･K･O･Q･S） …… 12
第12図　A区SB1、SA1 ～ 3遺構図 …… 13
第13図　SA･SE･SK遺構図 …… 14
第14図　C区遺構図 …… 15
第15図　A区SD1･2･旧美大施設基礎遺構図 …… 16
第16図　出土遺物１ …… 17
第17図　出土遺物２ …… 18

表　目　次

第２表　近世遺跡地名表 …… 5
第２表　出土遺物観察表 …… 18

図版目次

図版１　遺構１
図版２　遺構２
図版３　遺構３
図版４　遺構４
図版５　遺構５
図版６　出土遺物

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調 査 の 経 緯

金沢城下町遺跡（本多氏屋敷跡地区）の発掘調査は、東京国立近代美術館工芸館移転整備事業に起因する。本事業は、国の地方創生施策の一環である政府関係機関の地方移転にかかり、東京都千代田区に所在する工芸館を石川県金沢市へ移転するものである。移転先は、藩政期から近代に至るまでの各時代の歴史的建物や文化施設が集積した文化ゾーン「兼六園周辺文化の森」の一角、県立美術館と県立歴史博物館の間に計画され、その施設は、明治期に建てられた旧陸軍の「旧第九師団司令部庁舎」と「旧金沢偕行社」（ともに国登録有形文化財）を移築し活用するものである。東京国立近代美術館工芸館は日本海側初の国立美術館として、令和２年７月の開館が予定されている。

石川県教育委員会文化財課（以下、文化財課）では毎年、関係部局に対し実施予定事業の照会を行い、各事業について埋蔵文化財の保護が図られるよう調整を行っている。上記工芸館移転整備については、所管の県民文化スポーツ部文化振興課からの依頼を受けた文化財課が平成28年10月11日に分布調査を実施し、金沢城下町遺跡（本多氏屋敷跡地区）の分布を確認した。文化財課は、その旨文化振興課に報告するとともに、以後、その取り扱いについて協議を重ねた。結果、現状で計画変更は困難であることから、当該箇所については事前に発掘調査を行い記録保存とすることとなった。

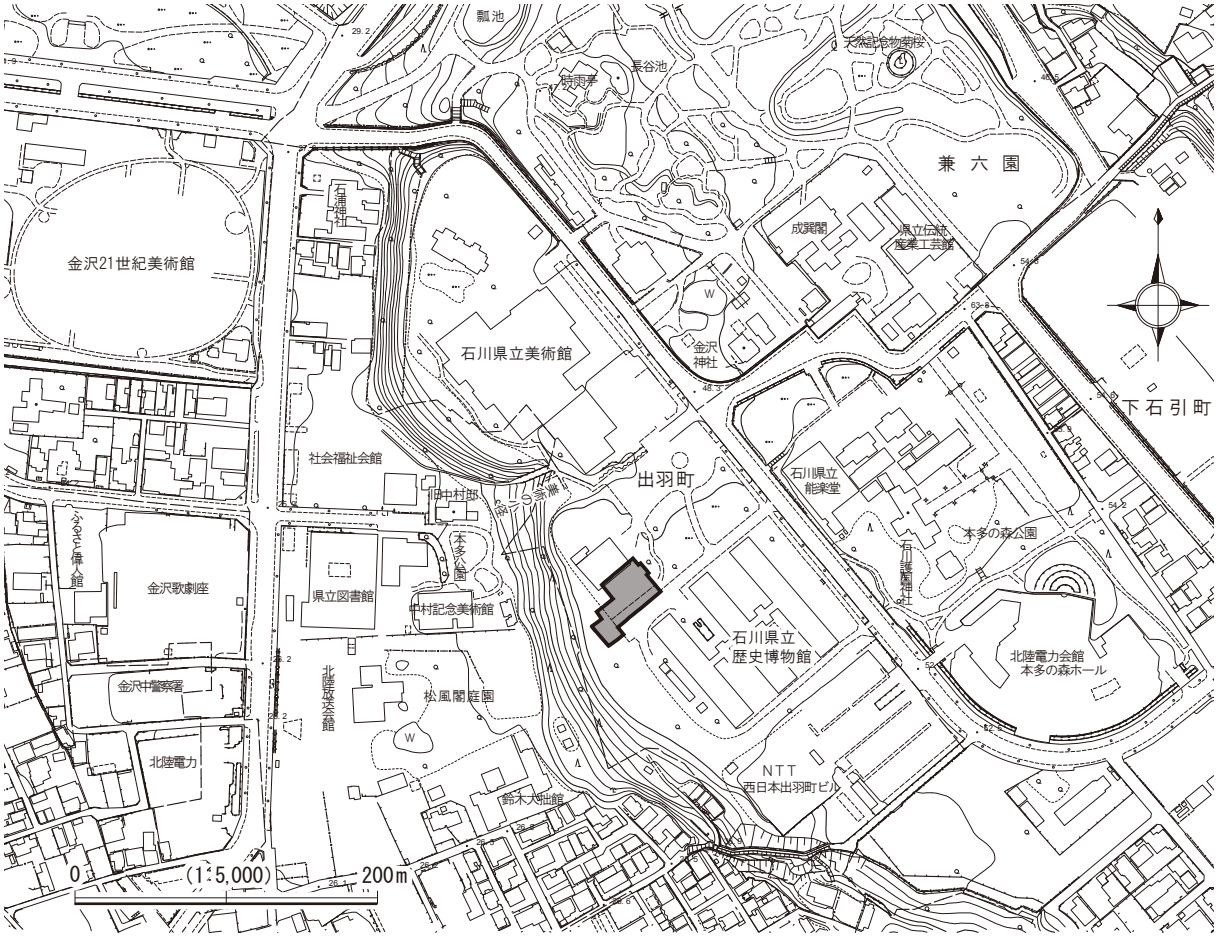
第２節　現地調査、出土品整理、報告書作成･刊行の経過

発掘調査は、事業者からの依頼を受けた県教委の委託事業として平成29年度に公益財団法人石川県埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）が実施した。工事を担当する企画振興部企画課からは、平成29年９月１日付け企第729号で文化財保護法第94条に基づく発掘通知が県教委に提出され、県教委は同日付け教文第1790号で発掘調査が必要である旨企画課に通知した。埋文センターは、９月１日付け財埋第281号で発掘調査届を県教委に提出、県教委からは同日付け教文第1961号により発掘調査届に対する通知を受けた。９月12日には土木部公園緑地課・県立歴史博物館等の関係機関・部署と打合せを行い、調査範囲、排土置場や仮設事務所の設置場所等について協議を行った。現地での発掘調査期間は10月16日～ 12月26日で、調査対象面積は当初840㎡であったが、工事計画の変更に伴いＣ区（第５図）南西部340㎡が追加され、調査面積は1,180㎡となった。事前準備から10月末までを舘　直人、林　大智が、11月からは館、澤辺利明が調査を担当し、12月からは佐々木華子が加わった。

調査は、仮設事務所への進入経路や表土置き場の都合等から、調査区を３分割し、Ａ・Ｃ・Ｂ区（第２図）の順に調査を進めた。また、Ｃ区南西部は樹木の生い茂る緑地であったが、特に大木については事前の伐採･搬出が不可であったことから、これを残した調査となり不定形のトレンチ調査となった。

出土品については、金沢中警察署に12月26日付け財埋第352号で埋蔵物発見届を提出。平成30年１月16日付け収文保第753号により金沢市教育委員会から文化財と認定した旨通知を受けた。

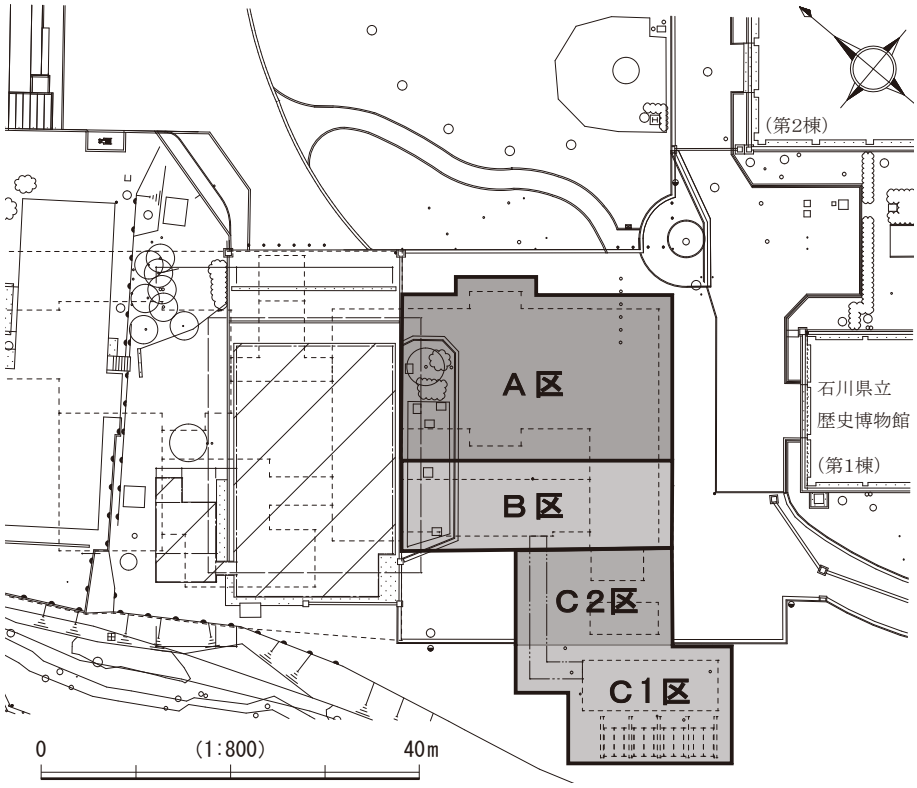
出土品整理、報告書原稿作成・編集・刊行は事業者から依頼を受けた県教委の委託事業として埋文センターが実施した。出土品整理は、平成29年度に出土品洗浄を、平成30年度に遺物の記名・分類・接合・実測・トレース等を実施した。令和元年度には報告書原稿作成・編集・刊行を実施した。



第１図　調査区の位置

◎調査体制（平成29年度）	
業務内容	発掘調査
業務主体	（公財）石川県埋蔵文化財センター（理事長　田中新太郎）
総　　括	柴田政秋（専務理事）
事　　務	釜親利雄（事務局長）
総　　務	横山謙一（総務ＧＬ）
経　　理	西　邦広（総務Ｇ専門員）
担　　当	藤田邦雄（所長）
	垣内光次郎（調査部長）
	久田正弘（県関係調査ＧＬ）
	松山和彦（特定事業調査ＧＬ）
◎整理体制（平成30年度）	
業務内容	出土品整理
業務主体	（公財）石川県埋蔵文化財センター（理事長　田中新太郎）
総　　括	紺野欽一（専務理事）
事　　務	釜親利雄（事務局長）
総　　務	山口　登（総務ＧＬ）
経　　理	西　邦広（総務Ｇ専門員）
担　　当	藤田邦雄（所長）
	垣内光次郎（調査部長）
	川畑　誠（国関係調査ＧＬ）
◎整理体制（令和元年度）	
業務内容	報告書原稿作成・編集・刊行
業務主体	（公財）石川県埋蔵文化財センター（理事長　田中新太郎）
総　　括	紺野欽一（専務理事）
事　　務	釜親利雄（事務局長）
総　　務	伊藤　直（総務ＧＬ）
経　　理	山崎　修（総務Ｇ専門員）
担　　当	垣内光次郎（所長）
	伊藤雅文（調査部長）
	久田正弘（県関係調査ＧＬ）

（G：グループ，L：リーダー）



第２図　工事計画と調査区の位置

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地 理 的 環 境

金沢城下町遺跡（本多氏屋敷跡地区）が所在する金沢市は、面積468.6㎢、人口約466,000人（令和元年６月１日推計値）を擁する石川県の県都である。旧加賀国の北部に位置し、江戸時代の藩政期に城下町として繁栄した町並みは、戦火を逃れ現在も古い都市構造を留めている。町を歩けば、古い建造物が目にとまるだけでなく、道路の一部が急に広くなる「広見」や、屈曲して先が見えない路地など、城下町に特徴的な地割りが残る。往時の姿をうかがえるこうした旧市街地に対しＪＲ金沢駅以北では、県庁移転や北陸新幹線開通等を機としたビジネス街の発展、水田や畑作地帯から新興住宅地への変化など、様変わりが激しい。近年では金沢港の整備も進み、古代には大野湊として、藩政期から明治には北前航路によって栄えた一帯が、国際物流や大型クルーズ船の拠点としてさらに大きく拓かれようとしている。

第３図　遺跡の位置

その地形を見ると、市域南東部には市内最高峰の奈良岳をはじめ、標高1,500m以上の山々が並ぶ。北西部においては、その山地に源を発する犀川・浅野川の両河川により、扇状地である金沢平野が形成されている。なお、山地と平野の境界付近には森本・富樫断層帯が分布する。また、市街東方に位置する戸室山やキゴ山は、金沢城の石垣に用いられた「戸室石」の産地として知られ、戸室石切丁場では当時搬出されなかった石が今も残る。戸室石は斜方輝石を含む角閃石安山岩で、色合いにより赤戸室や青戸室と呼ばれており、市内の墓所では墓石としても多用されている。さて、戸室山より切り出した戸室石を城まで引いた道として、石引という名が残っているのが小立野台地である。小立野段丘とも呼ばれる犀川と浅野川に挟まれた河成段丘であり、城下町や旧市街は、この段丘崖及び下位段丘上に立地している。

本調査地が位置する出羽町は、金沢城の南側、兼六園の南西に接した地区である。現在は、ＮＴＴ西日本出羽町ビル、石川県立歴史博物館･加賀本多博物館、石川県立美術館などの施設が所在している。出羽町の地名は、藩政初期、藩の重臣であった篠原出羽守一孝とその一族・家臣などが住んでいたことに由来し、元禄頃までは出羽殿町とも呼ばれていた。

第２節　歴 史 的 環 境

以下では、第４図に基づき、近世の金沢城下町遺跡を主に調査地周辺の遺跡を概観していく。

金沢城と城下町は、一向宗の拠点であった金沢御堂（尾山御坊）とその寺内町を基に築かれたもので、特に17世紀前半にあたる寛永期、前田家三代藩主前田利常の治政下で、大規模な整備がなされた。先述した台地の突端に位置する城を中心に、段丘崖部の高低差を利用した「惣構」が築かれている。金沢城下町では、城下の内側に内惣構、外側に外惣構と二重の惣構が設けられているが、金沢市は平成23年４月、市史跡金沢城惣構跡で囲まれた内側の区域及び重要文化的景観として国の選定を受けている出羽町付近を含む約200haの範囲を、周知の埋蔵文化財包蔵地「金沢城下町遺跡」として周知し、近世城下町遺跡の一体的保護を図ることとした。

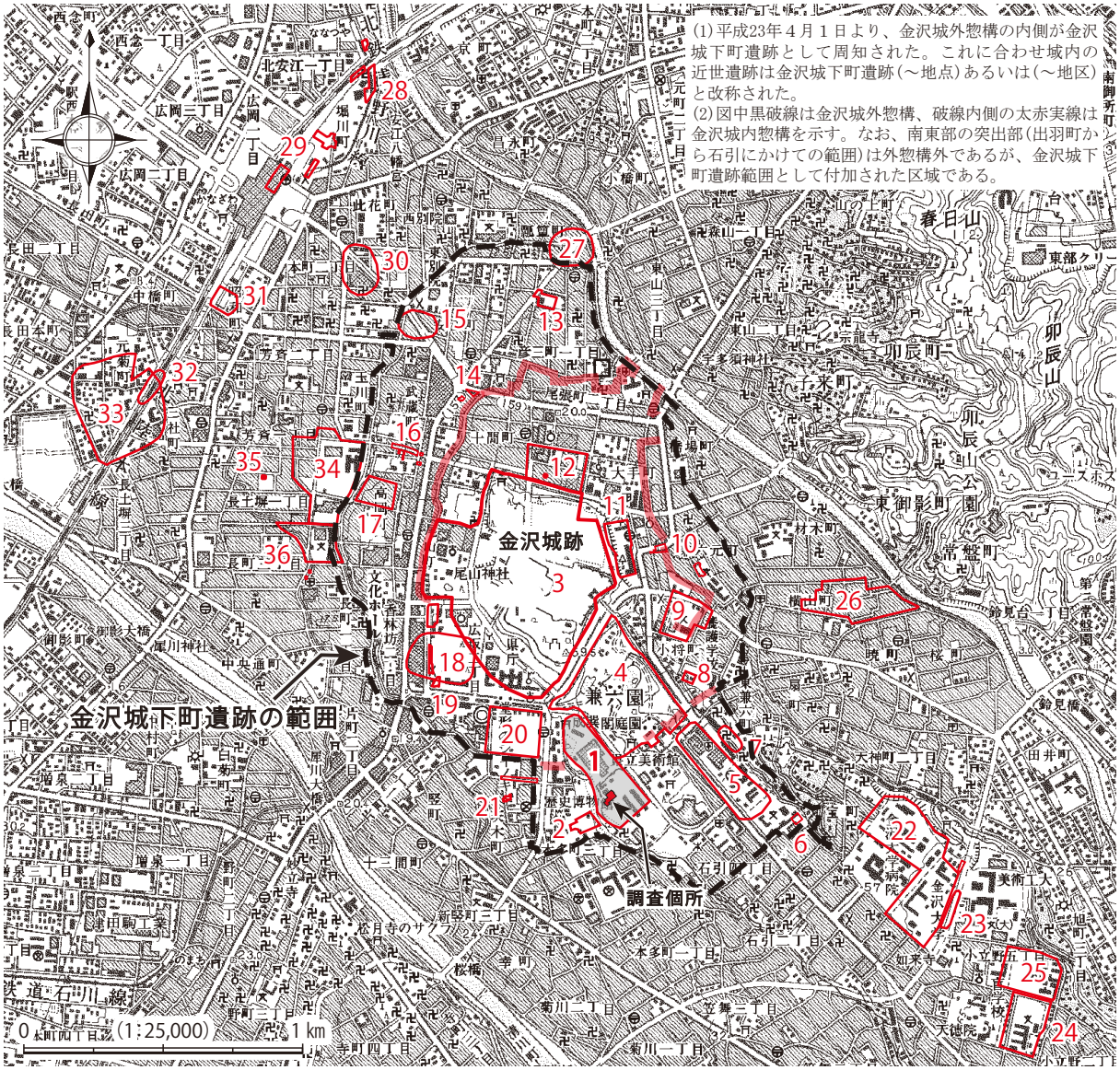
金沢城跡（3）は、先述したように一向宗の拠点であった金沢御堂を基に築かれた。金沢御堂は、天文15（1546）年、現在の本丸付近に建立されたと伝えられている。天正８（1580）年に織田方の主将柴田勝家によって落ち、甥の佐久間盛政が城主となったのち近世城郭としての整備が進んだ。その三年後に城主となった前田利家の時代に縄張りが固まり、以後、前田家十四代の藩主が居住した。金沢城初期の縄張りについては史料が乏しいが、発掘調査の結果、いもり堀の内側に寛永期以前の「古いもり堀」が確認されるなど、現状とはかなり異なる構造であったと推定されている。その後も改修等がなされたが、とりわけ寛永８（1631）年には、城下で発生した火災により本丸などが燃え落ちたため、辰巳用水の引水をはじめ最も大規模な城普請が行われた。明治の廃城後は陸軍省の所轄となり、明治31（1898）年に陸軍第九師団司令部が置かれた。太平洋戦争後は新設された金沢大学丸の内キャンパスとして長く使用されたが、同大学の移転に伴ない、平成８（1996）年に石川県が国から取得、以後は金沢城公園として整備され、発掘調査が継続的に行われている。平成20（2008）年には国史跡に指定され、五十間長屋・橋爪門・河北門・玉泉院丸庭園などが、発掘成果を基に復元・整備されている。

城下の範囲を規定する惣構については、慶長４（1599）年に造られた外惣構と、慶長15（1610）年に造られた内惣構が二重に存在している。造成時、堀は最大約５ｍの深さ、土居は堀底から最大約９ｍの高さがあったと推定されている。内外惣構は、金沢城から見てそれぞれ東内惣構・西内惣構・東外惣構・西外惣構と呼ばれ、全体で約９㎞を測る。明治期以降、土居の盛土は大部分が堀の埋土として用いられほとんど消失した。堀も幅を縮小し現在では一部が用水路として残るのみである。しかし、平成17年以降、金沢市による確認調査が断続的に実施されており、現在は当時の線形をほぼ復元するまでに至っている。

前田家家臣の屋敷は、いわゆる加賀八家の屋敷地を含め発掘調査が多数実施されている。八家とは、一万石以上の家禄を有し加賀藩の家老職である年寄職を出した大家で、本多･横山･長･村井、前田両家･奥村両家がこれに該当する。前田氏（長種系）屋敷跡地区（12）では、屋敷地に関わる井戸、土坑のほか、それ以前の屋敷地や井戸などが検出された。長氏屋敷跡地区（34）では、17世紀前半の整地面が確認されている。本多氏上屋敷跡地区（1）については後述する。本多氏下屋敷跡（本多町三丁目地点）（2）では、屋敷地及び道路跡、辰巳用水の分流などが確認されている。奥村氏（宗家）屋敷跡地区（5）は、金沢城とその周辺に陸軍関係施設が置かれたことに伴ない、駐屯（衛戍）地内の病院として金沢衛戍病院が置かれ、それ以後、国立金沢病院、独立行政法人国立病院金沢医療機構センターとして利用されている。県や市により一部で試掘調査が行われているが遺存状況等は明らかでない。また、城下外ではあるが、小立野ユミノマチ遺跡（25）の調査では、横山家下屋敷の一角と持筒組・持弓組の足軽屋敷の存在が明らかになり、城下町外縁のあり方を垣間見せている。城下においては八家以外にも、上級武士の屋敷である丸の内７番地点（11）が調査され、礎石建物・庭園・井戸・道路跡等が検出された。

町屋では、本町１丁目遺跡（30）、昭和町遺跡（31）などの調査事例がある。本町１丁目遺跡では井戸を備えた間口３間の屋敷が発掘された。昭和町遺跡では、道路に面した間口３間、奥行６～７間の屋敷が確認されている。また、近世の鞍月用水や井戸なども検出され、井戸底からは輸入銭や寛永通宝といった銭と簪４本が出土した。掘削時の祭祀に用いられたものと推定されている。

墓地では、教王寺遺跡（23）、久昌寺遺跡（28）、木ノ新保遺跡（29）、東兼六町５番地区（7）などの調査がなされている。教王寺遺跡は教王寺旧地の調査で、境内内の墓地や火葬跡（灰塚）が確認された。久昌寺遺跡は城下の縁辺に位置する寺院墓地で、木棺・甕棺を用いた土葬墓と、蔵骨器を用いた火葬墓が発掘された。木ノ新保遺跡は城下の端に所在する、近世前期に始まる墓地で、早桶を使った土葬墓が約20基検出されている。東兼六町５番地区では曹洞宗鶴林寺・雲龍寺の墓地の調査が行われた。小立野台地の斜面に造営された慶長･元和期に始まる寺院墓地で、甕棺墓と木棺墓が検出された。



（国土地理院発行　２万５千分の１地形図「金沢」を使用）

第４図　金沢城下町遺跡と周辺の近世遺跡表

第１表　近世遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	番号	遺跡名	所在地
1	本多氏屋敷跡地区	金沢市出羽町	19	広坂２丁目地区	金沢市広坂２丁目
2	本多町３丁目地点	金沢市本多町３丁目	20	広坂１丁目遺跡	金沢市広坂１丁目
3	金沢城跡	金沢市丸の内	21	下本多町遺跡	金沢市下本多町
4	兼六園遺跡	金沢市兼六町	22	宝町遺跡	金沢市宝町
5	奥村家（宗家）屋敷跡地区	金沢市出羽町	23	経王寺遺跡	金沢市宝町・小立野５丁目
6	飛梅町地区	金沢市飛梅町	24	小立野４丁目遺跡	金沢市小立野４丁目
7	東兼六町５番地区	金沢市東兼六町	25	小立野ユミノマチ遺跡	金沢市小立野５丁目
8	東兼六地点	金沢市東兼六町	26	横山氏屋敷跡	金沢市横山町
9	奥村家（分家）屋敷跡地区	金沢市小将町	27	瓢箪町遺跡	金沢市瓢箪町
10	兼六元町７番地点	金沢市兼六元町	28	久昌寺遺跡	金沢市木ノ新保町他
11	丸の内７番地点	金沢市丸の内	29	木ノ新保遺跡	金沢市木ノ新保町他
12	前田氏（長種系）屋敷跡地区	金沢市大手町	30	本町１丁目遺跡	金沢市本町
13	彦三町地点	金沢市彦三町	31	昭和町遺跡	金沢市昭和町
14	青草町地点	金沢市青草町	32	三社町遺跡	金沢市三社町
15	安江町地区	金沢市安江町	33	元菊町遺跡	金沢市元菊町他
16	高岡町地点	金沢市高岡町	34	長氏屋敷跡地区	金沢市玉川町他
17	前田氏（直之系）屋敷跡地区	金沢市高岡町	35	穴水町遺跡	金沢市長土塀
18	広坂２丁目遺跡	金沢市広坂２丁目	36	村井氏屋敷跡	金沢市長町１丁目

鶴林寺・雲龍寺は加賀藩の中～下級武士の菩提寺で、調査の結果、17世紀後半から18世紀の初めに造墓活動が盛んになったことが分かった。

さて、本多氏屋敷跡地区については、平成21～23年、金沢市教育委員会が「本多家上屋敷関連遺構群詳細調査事業」として試掘と地形測量を実施しており、台地下に位置した下屋敷と台地上の上屋敷を結ぶ崖地において、石垣・道・塀・門などを確認している。崖地上の上屋敷跡については現在、石川県立美術館が置かれている。館建設等に伴い主に県による発掘調査が実施されてきたが、これまでのところ、先行する陸軍第九師団司令部の官舎などによる損壊が著しく詳細は明らかでない。平成26年には美術館に接し石川県文化財保存修復工房が整備され、これに先立ち実施した発掘調査では本多氏上屋敷北側の台地西端が調査対象となった。近世末以降及び近世後期以前の２面の遺構面を確認した。遺構は浅い土坑や溝を検出し、遺物は17世紀前半～19世紀の陶磁器が出土している。調査結果と絵図の検討から、近世前期～中期には屋敷地内に設けられた庭園の一角としてあり、それ以降は空閑地であった可能性が推定されている。

以下、近世以降の当該地の土地利用の変遷等を示しておく。

1　慶長17（1612）年　本多政重が現在の出羽町に上屋敷を構える（前田利長の書状「屋敷裏石垣出来の祝いに付書状」）
2　宝暦９（1759）年以前　『本多家上屋敷図』（金沢市立玉川図書館蔵）
3　寛政年間（1789～1800）『上屋敷絵図』（加賀本多博物館蔵）
4　嘉永３（1850）年　『上屋敷絵図』（加賀本多博物館蔵）
5　明治10（1877）年　陸軍省が金沢練兵場を取得（「金沢練兵場地受領の儀」『太政類典』）
6　明治21（1888）年　『金沢市街之図』に「陸軍所轄地　練兵場」とみえる
7　明治32（1899）年　金沢陸軍兵器支廠が出羽町に移転
　＊明治42（1909）～大正３（1914）年　兵器庫第１～７棟竣工
8　大正11（1922）年　第九師団長官舎・同副官官舎・兵器支廠事務所・馬丁控所など建設
9　昭和21（1946）年　私立金沢女子専門学園（のち金沢女子短期大学、現県立美術館敷地に設置）
　　同　　年　金沢美術工芸専門学校（校舎は兵器庫第５～７棟を利用）
　＊今回調査地Ｃ区には工芸デザイン実験棟、窯場を建設、ほか体育館、図書館等建設
　＊昭和30（1955）年～金沢美術工芸大学、昭和47（1972）年、金沢市小立野５丁目に移転
10　昭和48（1973）年　藩老本多蔵品館設置（美大図書館棟を利用）
11　昭和58（1983）年　石川県立美術館建設
12　昭和61（1986）年　石川県立歴史博物館開館（建物は兵器庫第５～７棟を利用）

【１～３章の主な引用・参考文献】

金沢美術工芸大学同窓会　1986　『金沢美術工芸　同窓会40年史」
石川県立歴史博物館　1999　『前田利家没後400年　城下町金沢の人々―よみがえる江戸時代のくらし―』
楠　正勝他　2004　『石川県金沢市　昭和町遺跡Ⅲ』　金沢市埋蔵文化財センター
金沢市史編さん委員会　2005　『金沢市史　通史編２　近世』　金沢市
川畑　誠他　2016　『金沢市　金沢城下町遺跡（本多氏屋敷跡地区）』　石川県教育委員会・（公財）石川県埋蔵文化財センター
和田龍介他　2017　『金沢市　金沢城下町遺跡（東兼六町５番地区）』　石川県教育委員会・（公財）石川県埋蔵文化財センター
金沢市　2017　『金沢の文化的景観　城下町の伝統と文化　保存計画書』
庄田知充　2018　『本多家上屋敷西面門跡及び塀跡附道跡調査報告書』　金沢市埋蔵文化財センター

第３章　調査の結果

第１節　調査の概要（第５・６・９・10図）

概　　要　東京国立近代美術館工芸館の建物は、調査地の北東約200ｍに位置する旧陸軍の「旧金沢偕行社」と「旧第九師団司令部庁舎」を移築し活用するものである。そのうち「旧金沢偕行社」移築箇所については、金沢市立美術工芸大学図書館（のちに藩老本多蔵品館）および石川県庁出羽町分室建設等の建設により地下遺構が破壊されていたことから、発掘調査対象は「旧第九師団司令部庁舎」設置箇所が主となった。調査着手時にはこれら建物は解体され、下に記述するＡ・Ｂ・C2区は駐車場であり、C1区は樹木の生い茂った緑地であった。このC1区については大型の立木は残したことから、幅２～３ｍのトレンチ調査となった。

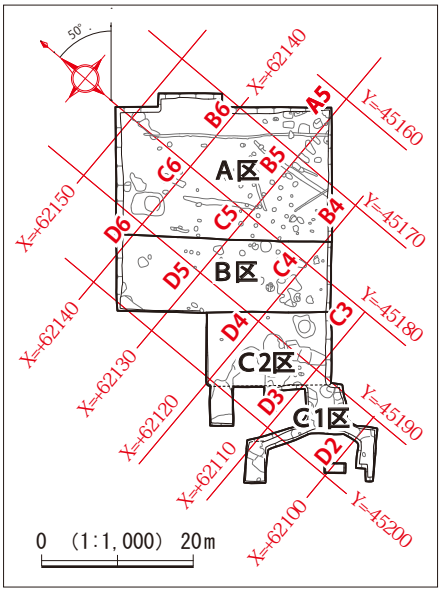
調査区割り　調査区全体に平面直角座標第Ⅶ系（世界測地系）による一辺10ｍのグリッドをかけ、グリッドの南北帯には１・２‥とアラビア数字を、東西帯にはＡ・Ｂ‥とアルファベットをつけ、これを組み合わせ各グリッド名とした。また、調査区はＡ～Ｃの３区に分割し、Ｃ区はさらにC1・C2区に細分した。調査はＡ→C2→C1→Ｂ区の順に進めた。

基本層序　地表標高50.5ｍ前後、遺構検出面標高49.7 ～ 50.0ｍを測る。Ａ・Ｂ・C2区の堆積土壌について、Ａ区南東壁断面Ａ（第９図）の北東部箇所に代表させ示すと、１層：砂利層は駐車場路盤、４層：にぶい黄橙色粗砂（しまりあり）、７層：にぶい黄褐色細砂（よくしまる）、11層：灰色粘土（硬質）、12層：灰色粘土（硬質、レンガ片入る）、14層：褐灰色シルト（玉砂利含む）、16層：灰黄色粘質土、17層：浅黄色粘土、A地山土：淡灰色シルト（１～ 30㎝大の礫多量に含む）である。調査箇所については６頁に記したように、近世においては加賀藩本多家の上屋敷地であった。明治期に陸軍練兵場とした際あるいはその後の兵器支廠設置に伴い広範囲に削平され、盛土の上整地されたとみられるが、11・12層は砂利混じりの土壌を重ねた硬質土であり、練兵場等設置に伴う整地土と推定する。その後も、時期不詳だが４・７層など以後の施設等整備に伴う盛土が重ねられていた。一方、緑地となっていたC1区には明治期の削平は及んでいなかったものの、ここには戦後、金沢市立美術工芸大学工芸デザイン実験棟が設置されていた。その建設及び撤去に伴う深い撹乱が多くを占めており、最終的に黄色細砂による厚い盛土のうえ緑地とした状況が窺われた。また、C1区内の４トレンチＣとした箇所にはデザイン棟とみられる建物の基礎が残っていた。以上のように、近代以降の削平・撹乱が多くを占めた中で、時期を特定する遺物は伴わず確定的ではないが、上の断面Ａ14層や第10図断面Ｄ中ほどの、玉砂利を主とする12・14層は近世期の整地面を残している可能性がある。

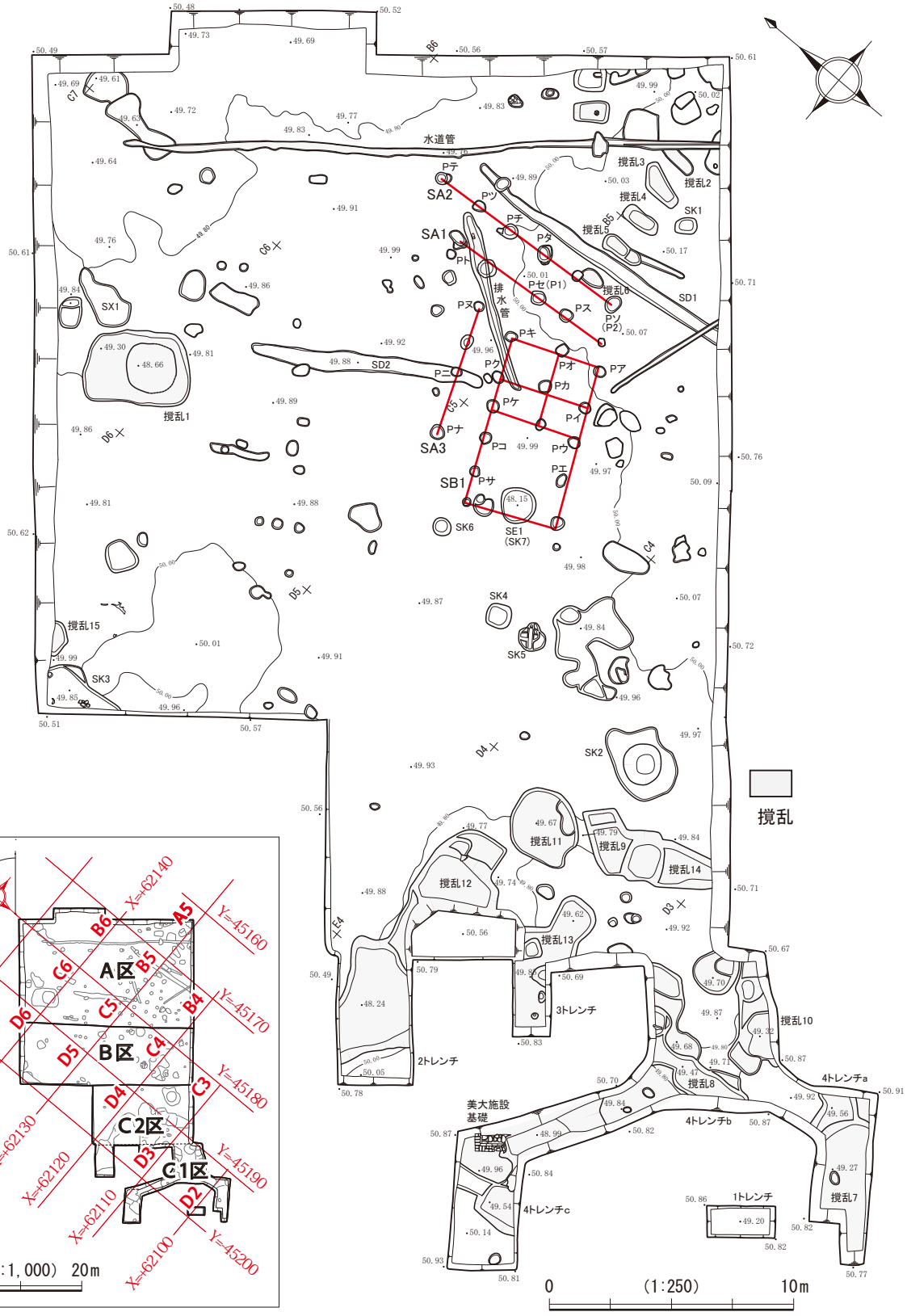
第２節　検出遺構･遺物

掘立柱建物（SB）１棟や塀･柵（SA）３基、井戸（SE）１基、土坑（SK）、小穴（P）などを検出したほか、15箇所で大小の撹乱が存在した。遺物は27点を図化した。

SB1（第６・12図）　Ａ・Ｂ区にまたがり位置する。梁間２間（3.75ｍ）×北桁６間（6.95ｍ）・南桁５間の建物を想定する。礎石は認められなかった。東側は２間×２間の総柱を、西側は側柱構造で、西端で井戸SE1に重なる。桁行はＮ65°Ｅを向く。南桁柱筋に比べ、北桁柱筋の通りが悪い。南桁の柱間寸法は東から1.61ｍ、1.51ｍ、1.63ｍ、1.65ｍを測る。東梁間は北から2.02ｍ、1.74ｍである。柱穴掘方は不整円形が多く、Pアで直径50㎝、深さ８㎝。Pケで直径53㎝、深さ８㎝を測る。いずれも削平を

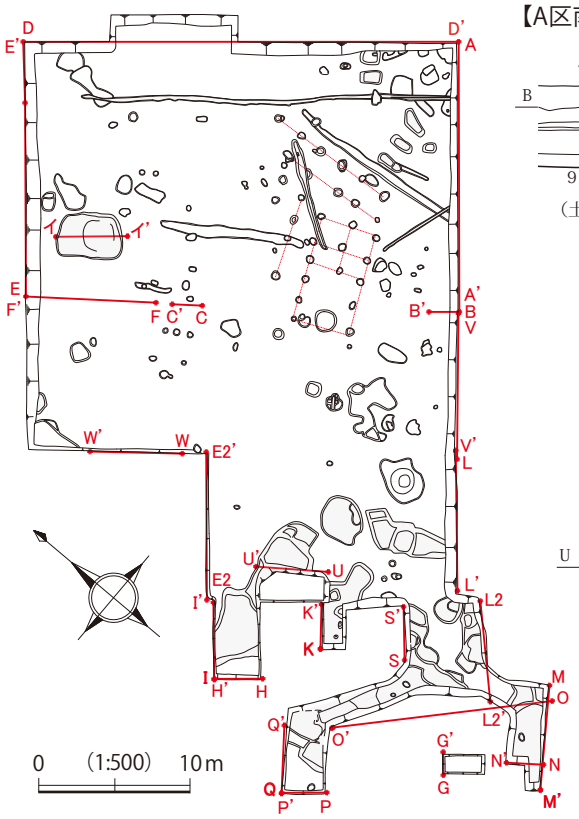


第５図　調査区・グリッド配置図



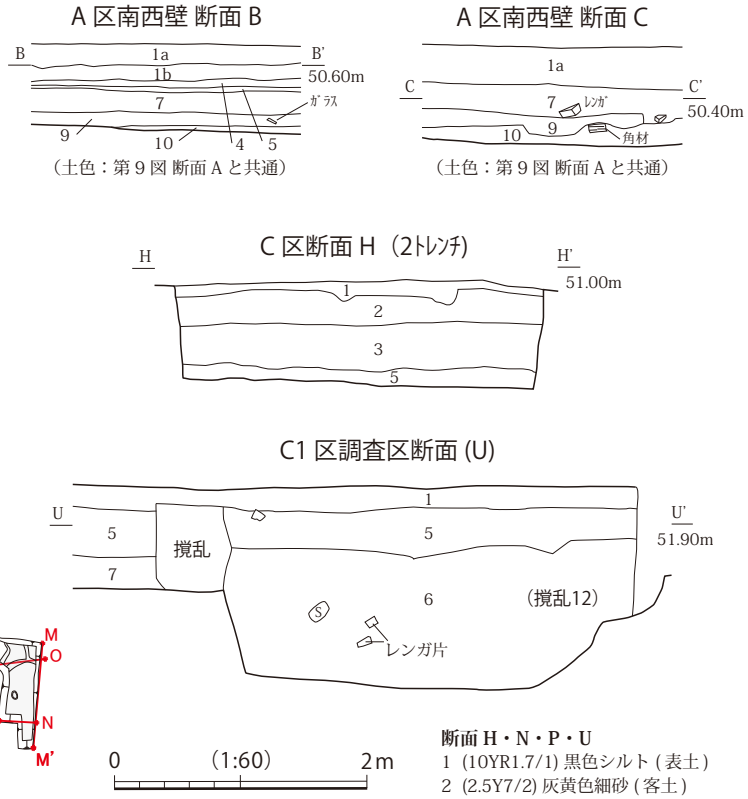
第６図　調査区全体図

【調査区壁　断面採図位置案内図】

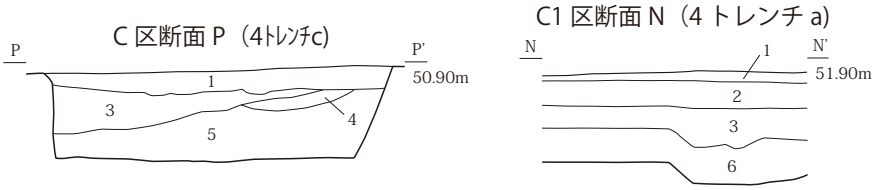


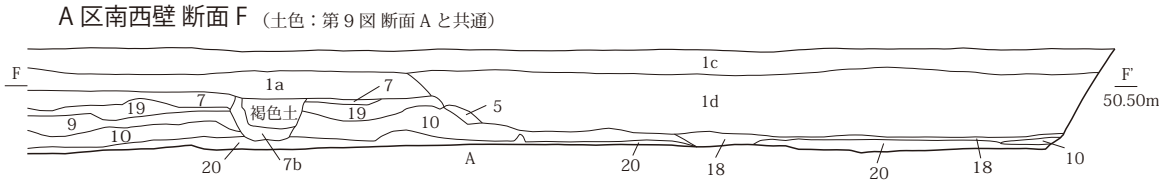
第７図　調査区壁断面採図位置案内図

【A区南西壁断面図】



断面 H・N・P・U
1 (10YR1.7/1) 黒色シルト (表土)
2 (2.5Y7/2) 灰黄色細砂 (客土)
3 (2.5Y6/6) 明黄褐色細砂
(しまり甘い)(美大時の盛土)
4 (10YR1.7/1) 黒色シルト
(旧表土 ?)
5 (10YR5/2) 明黄褐色シルト
(2 ～ 5cm 大礫並量混、レンガ・
コンクリート片含)
6 (10YR5/1) 褐灰色シルト
(2 ～ 10cm 大礫並量混)
7 (10YR5/4) にぶい黄橙色シルト
(2 ～ 5cm 大礫並量混)





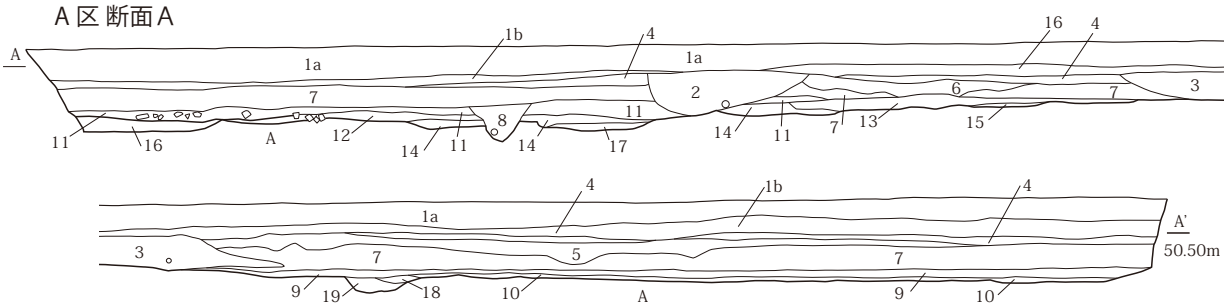
第８図　A区南西壁(B・C・F)、C区南西壁断面図(H・N・P・U)

被りごく浅いうえに大小の礫を含む地山に穿たれた柱穴であることから柱痕跡とは断定できないが、Pイ・ウ・オでは内面に直径20 ～ 26cmの不整円形プランが、Pキ・ク・ケ断面では直径12cm、深さ５cm程のくぼみが認められた。遺物は第16図１～３を図化した。１は18世紀代の肥前碗、２は同じく18世紀代の肥前の鉢、３も肥前の鉢である。

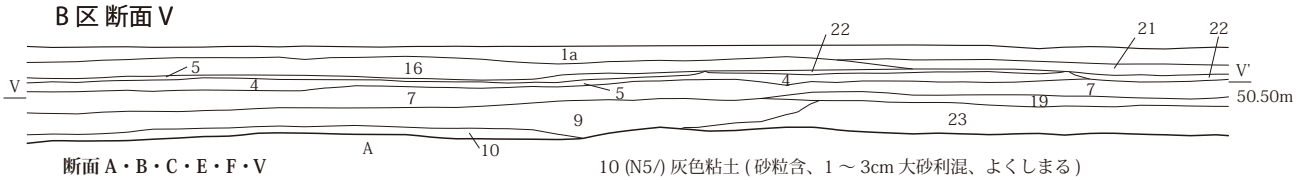
SA1（第６・12・13図）　SB1の東側に位置し、N4°Wを向く。SA2、SD1に同方向を向く。Pス・トなど５個の小穴より推定したが、SA2に比べ並びが悪い。柱間寸法は北から1.53m、2.43m、1.31m、1.79mである。柱穴掘方は不整円形から楕円形である。Pセで長径67cm、短径56cm、深さ50cmを測り、ほかの柱穴は深さ15cm前後を測る。他より深いPセ覆土のしまりの甘く他の柱穴に比べ異質で、一連の柱穴ではない可能性がある。

【調査区南東壁断面図】

A 区 断面A



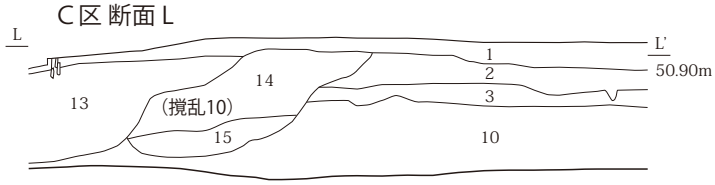
B 区 断面V



断面 A・B・C・E・F・V

1a (N6/) 灰色砂利 (駐車場路盤砂利)
1b (N4/) 灰色砂利 (玉砂利多く含)（駐車場路盤砂利層）
1c (N7/) コンクリート混、灰色砂利（駐車場路盤砂利層）
1d (N7/) 灰色砂利
1e (5Y4/1) 灰色砂利（駐車場路盤砂利層）
2 (2.5Y4/1) 黄灰色細砂 (小砂利多量含)[φ3cm エンビ管掘方]
3 (2.5Y4/1) 黄灰色細砂 (小砂利多量含)
4 (10YR7/3) にぶい黄橙色粗砂 (しまりあり)
5 (N4/) 暗灰色砂利
6 (5Y3/1) オリーブ黒色砂 (砂利含、硬質土)
7 (10YR4/3) にぶい黄褐色細砂 (よくしまる)
7b (7 層に黄色地山ブロック混)
8 (7.5Y5/1) 灰色シルト [φ5cm 鉄製水道管埋設坑]
9 (2.5Y5/2) 暗灰黄色砂 (1 ～ 3cm 大砂利少量混、よくしまる)
10 (N5/) 灰色粘土 (砂粒含、1 ～ 3cm 大砂利混、よくしまる)
11 (N4/) 灰色粘土 (炭粒少量、1 ～ 3cm 大砂利少量混)
12 (N4/) 灰色粘土 (レンガ片多量、1cm 大砂利少量混)
13 (10YR4/1) 褐灰色シルト (1 ～ 3cm 大玉砂利多く含、よくしまる)
14 (10YR5/1) 褐灰色シルト (1 ～ 3cm 大玉砂利少量含、よくしまる)
15 (2.5YR6/2) 灰黄色細砂 (1cm 大玉砂利少量含、しまりあり)
16 (2.5YR6/1) 黄灰色粘質土 (0.5 ～ 1cm 大砂利少量含)
17 (2.5Y7/4) 浅黄色粘土 (褐色粘土ブロック、1cm 大礫少量混)
18 (10YR3/1) 黒褐色シルト (2cm 大礫少量含)
19 (N5/) 灰色粗砂
20 (N4/) 灰色シルト (1 ～ 3cm 大礫並量含)
21 (10YR7/3) にぶい黄橙色粗砂
22 舗装アスファルト
23 (N4/) 灰色粘土 (しまりあり、2 ～ 15cm 大礫少量混)
A【地山土】(2,5Y8/4) 淡黄色シルト (1 ～ 30cm 大礫多量混)

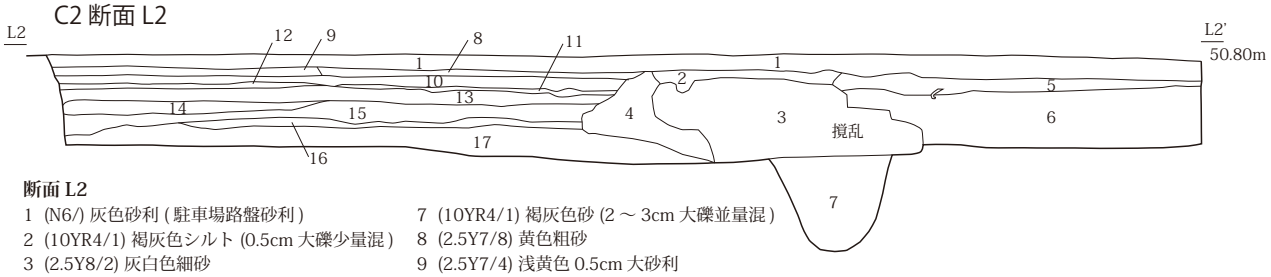
C 区 断面 L



断面 I・L・M・O・Q・S

1 (10YR1.7/1) 黒色シルト (表土)
2 (2.5Y7/2) 灰黄色細砂
2b (2.5Y7/2) 灰黄色細砂 (3 層ブロック混)
3 (2.5Y6/6) 明黄褐色細砂 (しまり甘い)(美大時の盛土)
4 (10YR5/2) 明黄褐色シルト (2 ～ 5cm 大礫並量混、レンガ・コンクリート片含)
5 (10YR5/1) 褐灰色シルト (2 ～ 10cm 大礫並量混、レンガ・コンクリート片含)
6 (10YR6/3) にぶい黄橙色細砂 (しまりあり)
7 (10YR5/4) にぶい黄橙色シルト (2 ～ 5cm 大礫並量混)
8 (10YR1.7/1) 黒色シルト (旧表土 ?)
9 (19YR7/6) 明黄褐色粗砂 (3 ～ 10cm 大礫多量混)
10 (10YR5/1) 褐灰色シルト (2 ～ 10cm 大礫並量混)
11 (10YR3/1) 黒褐色シルト (2 ～ 5cm 大礫少量混)
12 (2.5YR4/3) オリーブ褐色シルト (移植木の根巻土)
13 (10YR4/1) 褐灰色シルト
14 (2.5YR7/4) 浅黄色細砂
15 (2.5YR6/6) にぶい黄色細砂

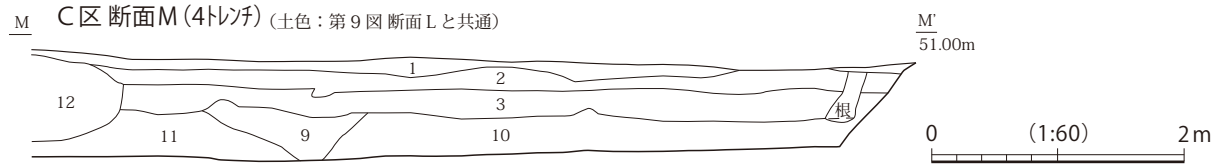
C2 断面 L2



断面 L2

1 (N6/) 灰色砂利 (駐車場路盤砂利)
2 (10YR4/1) 褐灰色シルト (0.5cm 大礫少量混)
3 (2.5Y8/2) 灰白色細砂
4 (2.5Y5/2) 暗灰黄色シルト (14 層ブロック混、2 ～ 5cm 大礫並量混)
5 (断面 L の 3 層に同じ)
6 (断面 L の 10 層に同じ)
7 (10YR4/1) 褐灰色砂 (2 ～ 3cm 大礫並量混)
8 (2.5Y7/8) 黄色粗砂
9 (2.5Y7/4) 浅黄色 0.5cm 大砂利
10 (7.5GY6/1) 緑灰色砂 (1 ～ 3cm 大礫多量混)
11 (5Y8/3) 淡黄色砂
12 (2.5Y7/8) 黄色粗砂
13 (2.5Y4/2)(断面 A 7 層に似る) 褐色砂しまる
14 (2.5Y4/2)(断面 V 9 層に類似) 灰色
15 (2.5Y4/2)(断面 V 10 層に類似)
16 (2.5Y4/2)(断面 V 9 層に類似) 褐色
17 (N4/)(断面 V 23 層に類似)

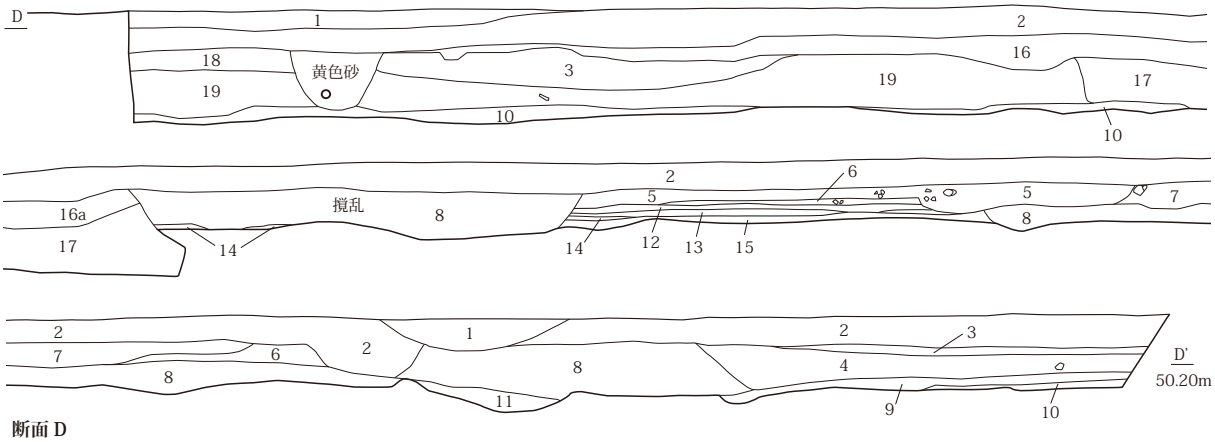
C 区 断面M（4トレンチ）（土色：第 9 図 断面 L と共通）



第 9 図　調査区南東壁断面図（A・V・L・L2・M）

【調査区北東壁断面図】

A 区 断面 D

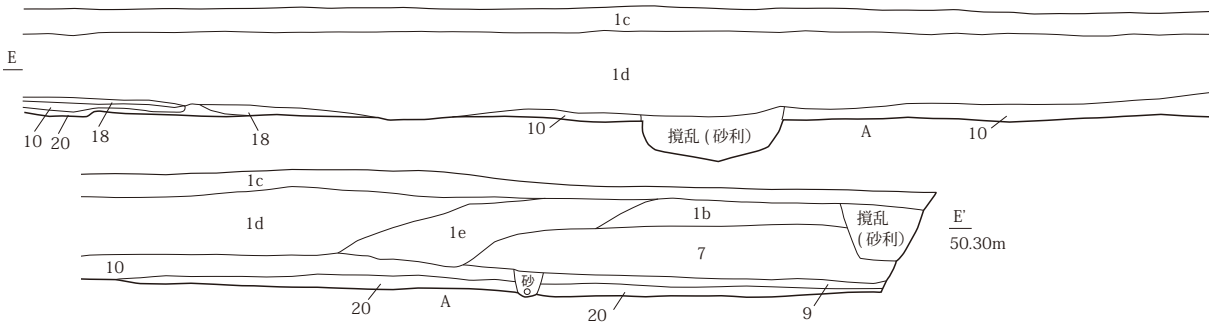


断面 D

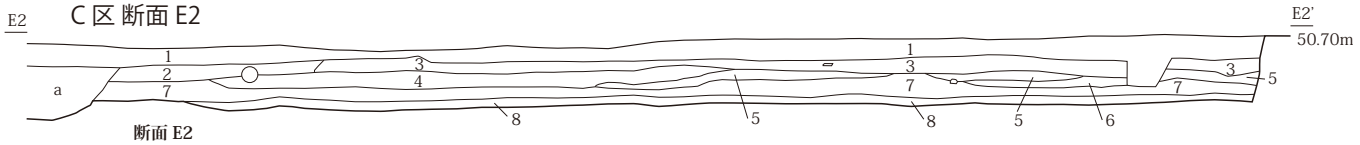
1 コンクリート混砂利層（駐車場路盤砂利層）
2 (断面 A 1a 層に同じ)（駐車場路盤砂利層）
3 (断面 A 1b 層に同じ)（駐車場路盤砂利層）
4 (断面 A 7 層に同じ)
5 (10YR2/2) 黒褐色シルト (3 ～ 10cm 大 6 層ブロック少量混、しまりあり)
6 (2.5Y8/4) 淡黄色シルト (1 ～ 2cm 大 5 層ブロック少量混、赤瓦・レンガ片含、しまりあり)
7 (10YR3/2) 黒褐色シルト (2 ～ 5cm 大礫並量混、しまりあり)
8 (10YR3/2) 黒褐色シルト (3 ～ 10cm 大礫少量混、しまりあり)
9 (断面 E 9 層に同じ)
10 (断面 E 20 層に同じ)
11 (2.5Y8/4) 淡黄色シルト (2 ～ 10cm 大礫多量混)
12 (断面 A 13 層に類似、玉砂利含有少ない)
13 (10YR4/1) 褐灰色シルト (1 ～ 3cm 大礫多量混)
14 1 ～ 3cm 大玉砂利
15 (10YR4/1) 褐灰色シルト (1 ～ 3cm 大礫、5 ～ 10mm 大玉砂利混)
16 (2.5Y8/3) 淡黄色細砂 (1cm 大砂利少量混、よくしまる)
17 (10YR4/1) 褐灰色シルト (1 ～ 5cm 大礫多量混)
18 (10YR2/2) 黒褐色シルト (1 ～ 5cm 大礫多量混)
19 (9 層に同じ、礫多量混)(赤瓦・ガラス片入る)

【調査区北西壁断面図】

B 区 断面 E（土色：第 9 図 断面 A と共通）



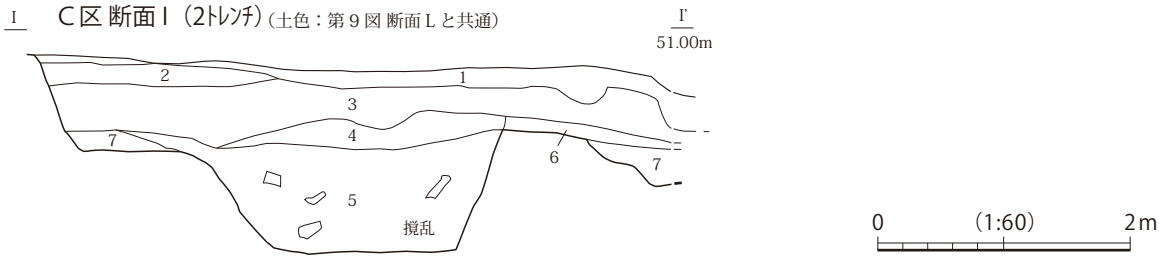
C 区 断面 E2



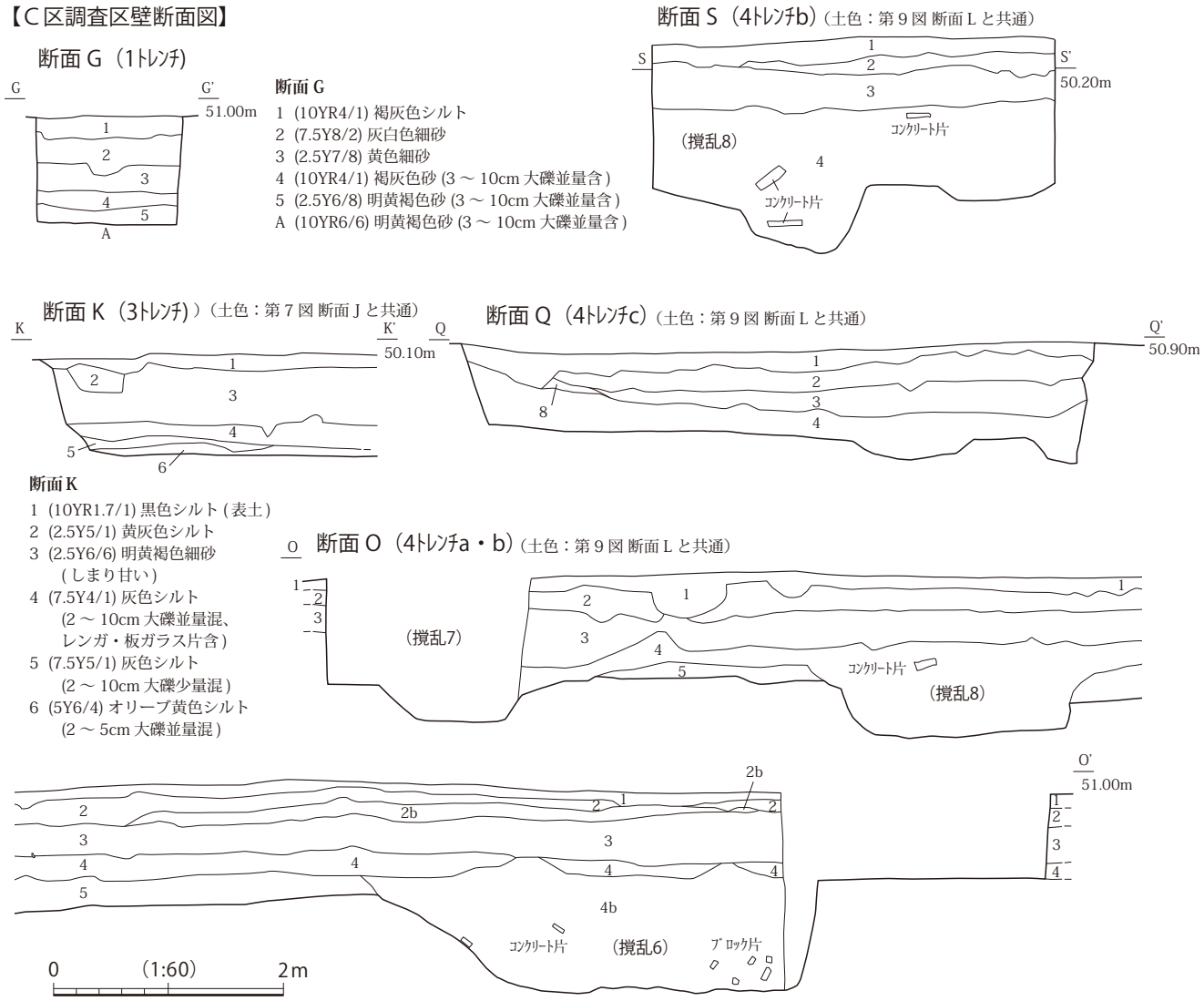
断面 E2

1 砂利
a (撹乱)(10YR4/1) 褐灰色シルト
2 (5Y8/4) 淡黄色粘土
3 (10YR4/2) 灰黄褐色細砂 (しまりあり、ガラス・タイル・レンガ片入る)
4 (10YR4/1) 褐灰色シルト (0.5 ～ 3cm 大礫並量入る)
5 (10YR8/3) 浅黄橙色シルト (0.5 ～ 3cm 大礫並量入る)
6 (2.5Y7/4) 浅黄色粗砂 (しまりあり、0.5 ～ 1cm 大礫並量混)
7 (10YR3/2) 黒褐色シルト (しまりあり、1 ～ 3cm 大礫少量混)
8 (10YR3/3) 暗褐色シルト (よくしまる、1 ～ 3cm 大礫少量混)

C 区 断面 I（2トレンチ）（土色：第 9 図 断面 L と共通）



第10図　調査区北東・北西壁断面図（D・E・E2・I）



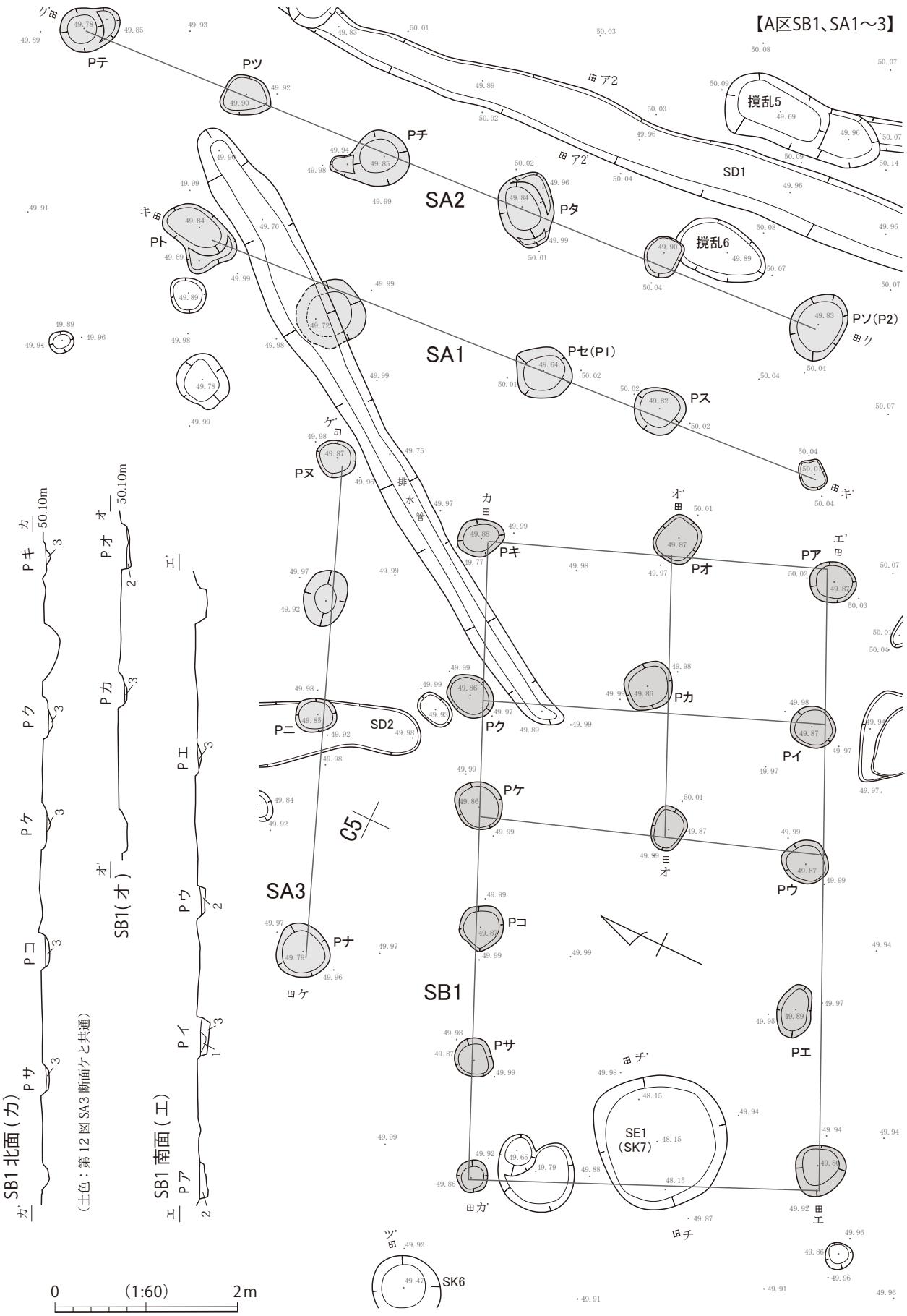
第11図　C区調査区壁断面図（G・K・O・Q・S）

SA2（第６･12･13図）　SB1の東側に位置し、N4°Wを向く。SA1、SD1に同方向を向く。Pソ･タなど6個の小穴より推定した。柱筋は比較的通る。柱間寸法は北から1.87m、1.60m、1.65m、1.62m、1.84mである。柱穴掘方は不整円形から楕円形で、Pチで直径59㎝、深さ18㎝を測る。

SA3（第６･12･13図）　SB1の７m北側で、Pナ･ニ･ヌなど４個の小穴より推定した。N68°Eと軸方位をほぼ同じくすることから、SB1に付随する施設の可能性がある。柱筋は比較的通り、柱間寸法は東から1.54m、1.33m、2.54mである。柱穴掘方は不整円形から楕円形で、Pナで長径62㎝、短径54㎝、深さ13㎝を測る。

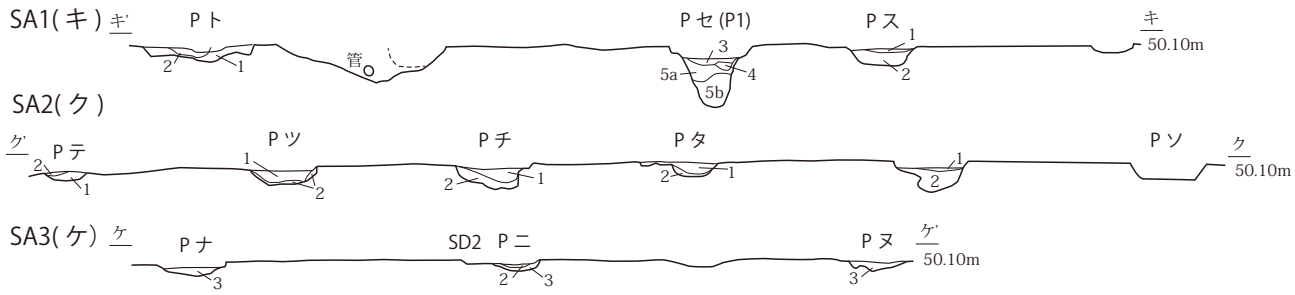
SE1（調査時SK7）（第６･12･13図）　B区でSB1西端に重複し位置する。平面形は一辺1.42mのやや不整な隅丸方形をなし、深さは２m以上。木枠等施設は認められず、岩盤質の地山に素掘りされたとみられる。覆土は暗褐色粘質土で直径10 ～ 30㎝の大小の礫を多く含む。湧水はなく、周辺での地表下－3.5mの試掘でも湧水はなかった。台地上の遺跡立地を考慮すると溜井戸の可能性がある。遺物は第16図１～３に示した。肥前の碗、鉢であり１・２は18世紀代の所産である。

SK1（第６･13図）　A区東隅に位置する。平面形は隅丸略長方形で、長径85㎝、短径63㎝、深さ46㎝を測る。中央の1層は柱痕跡の可能性がある。遺物は出土していない。



第12図　A区SB1、SA1～3遺構図

【A区SA1～3】

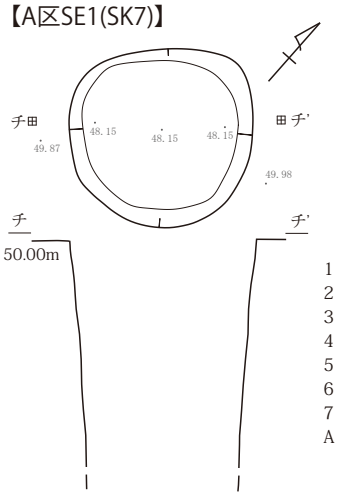


SA1(キ)
1 (10YR5/1) 褐灰色砂
2 (10YR4/2) 灰黄褐色砂
3 (10YR5/1) 褐灰色砂 (しまり甘い)
4 (N4/) 灰色粘土 (しまり甘い)
5a (10YR4/2) 灰黄褐色砂 (しまり甘い)
5b (10YR4/2) 灰黄褐色砂 (3cm 大橙色粘土ブロック少量混、しまり甘い)

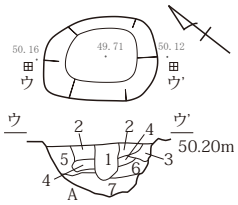
SA2(ク)
1 (10YR5/1) 褐灰色シルト (1 ～ 2cm 大礫少量混)
2 (10YR5/4) にぶい黄橙色シルト (1 ～ 2cm 大礫少量混)

SB1(エ・オ・カ)、SA3(ケ)
1 (10YR6/1) 褐灰色粘質シルト (2 ～ 3cm 大礫少量混)
2 (10YR5/1) 褐灰色粘質シルト (2 ～ 3cm 大礫少量混)
3 (10YR5/2) 褐灰色粘質シルト (2 ～ 3cm 大礫少量混)

【A区SE1(SK7)】

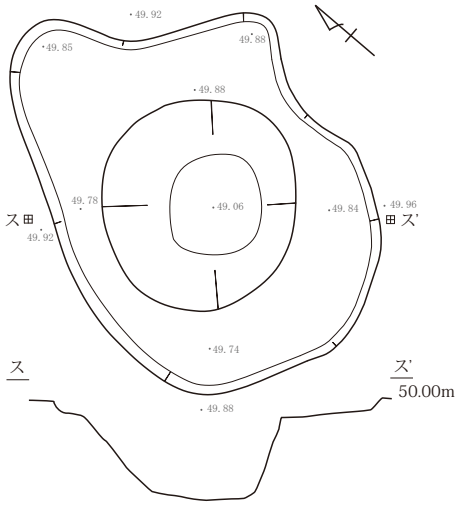


【A区SK1】

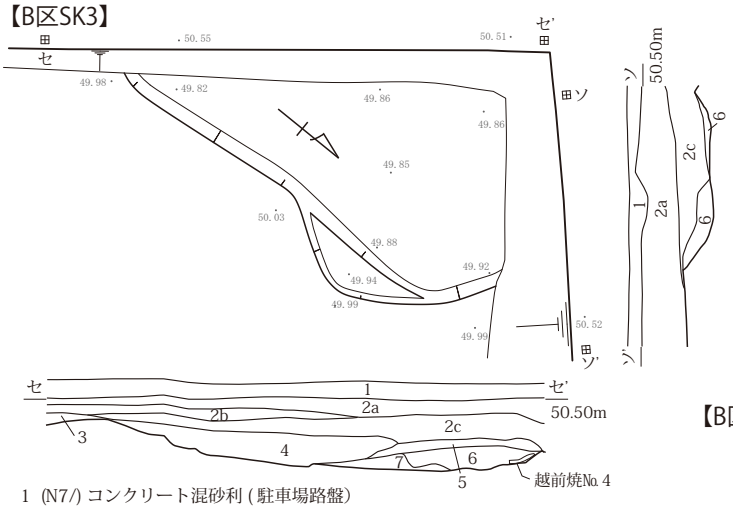


1 5cm 大 2・3・4 層ブロック土混
2 (10YR7/4) にぶい黄橙色粘土 (3 層ブロック少量混)
3 (10YR4/2) 灰黄褐色シルト
4 (2.5Y6/6) 明黄褐色粘土 (3 層ブロック少量混)
5 (10YR5/3) にぶい黄褐色粘土 (2 ～ 3cm 大礫少量混)
6 (10YR4/3) にぶい黄褐色粘土 (2 ～ 3cm 大礫少量混)
7 (10YR4/3) にぶい黄褐色シルト (2 ～ 3cm 大礫並量含)
A (10YR6/6) 明黄褐色細砂 (2 ～ 10cm 大礫並量混)

【C区SK2】

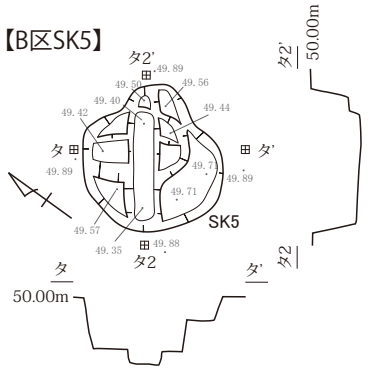


【B区SK3】

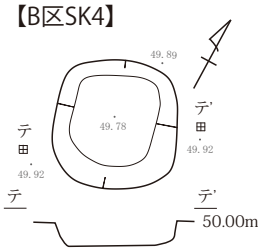


1 (N7/) コンクリート混砂利 (駐車場路盤)
2a (N7/) コンクリート混砂利 (駐車場路盤)
2b (N5/) コンクリート (駐車場路盤)
2c (N4/) コンクリート (駐車場路盤)
3 (N4/) 灰色シルト (1 ～ 3cm 大礫並量含)
4 (5YR4/3) にぶい赤褐色シルト
5 (5YR4/2) 灰褐色シルト (1 ～ 3cm 大礫並量含)
6 (5YR4/3) にぶい赤褐色シルト (1 ～ 3cm 大礫並量含)
7 (10YR4/3) にぶい黄褐色シルト (1 ～ 3cm 大礫並量含)
※4 ～ 7 層：SK3 覆土

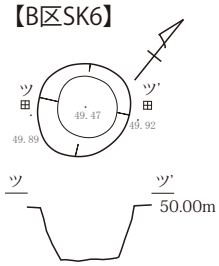
【B区SK5】



【B区SK4】

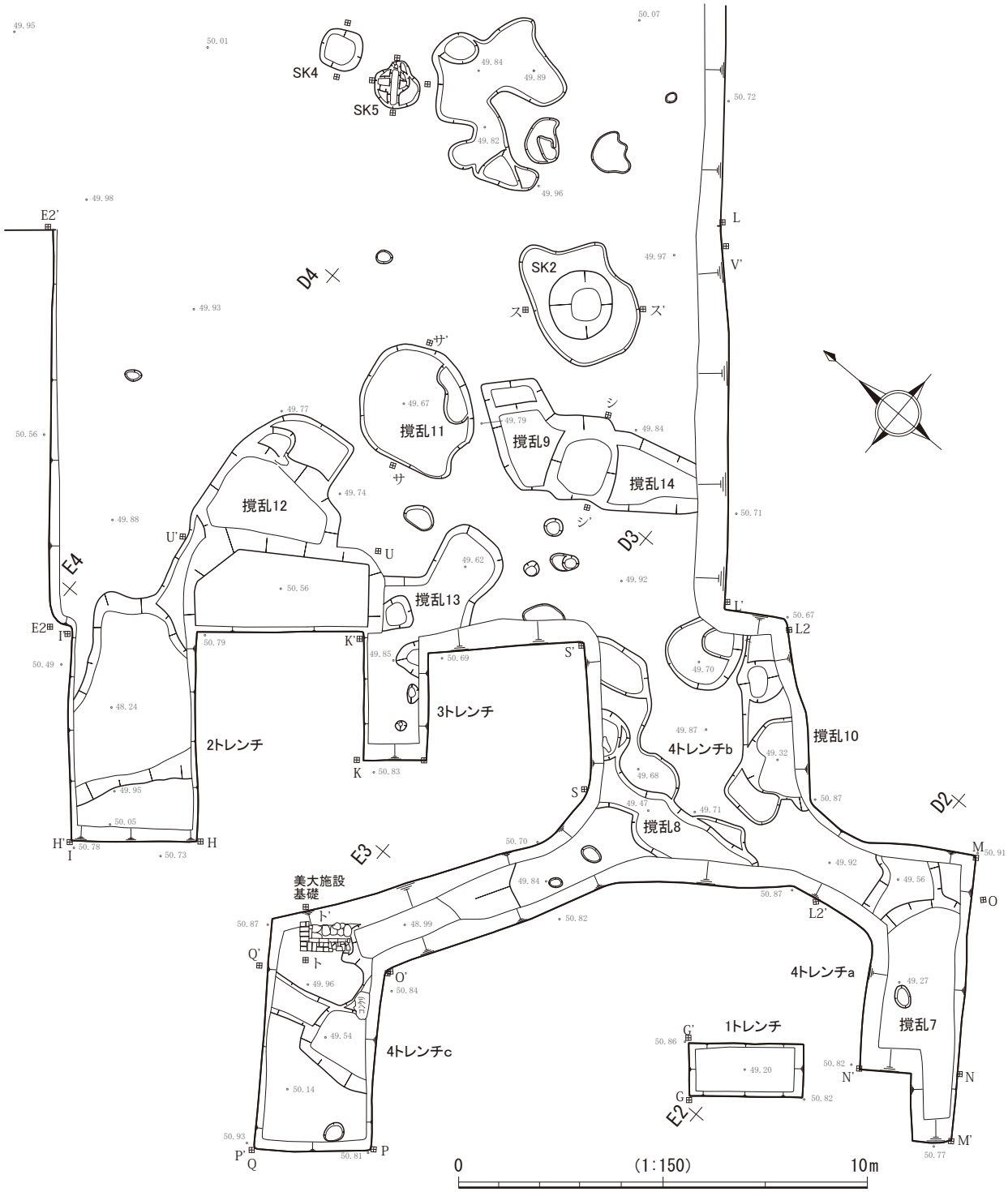


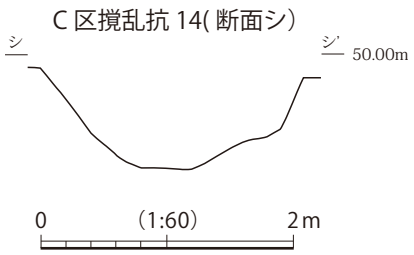
【B区SK6】

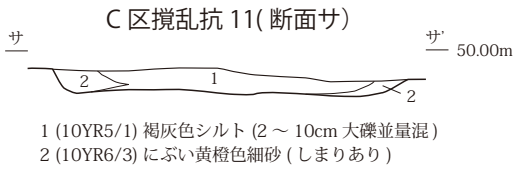


0 (1:60) 2m

第13図 SA・SE・SK遺構図

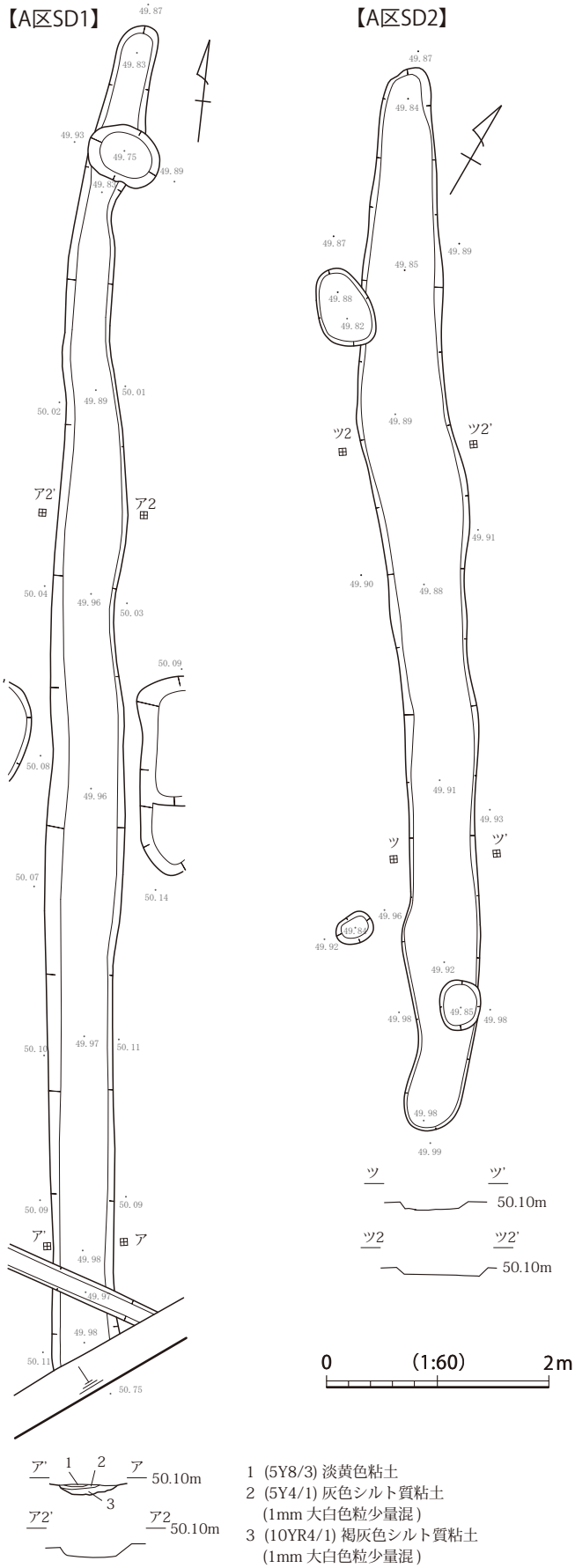






1 (10YR5/1) 褐灰色シルト (2 ～ 10cm 大礫並量混)
2 (10YR6/3) にぶい黄橙色細砂 (しまりあり)

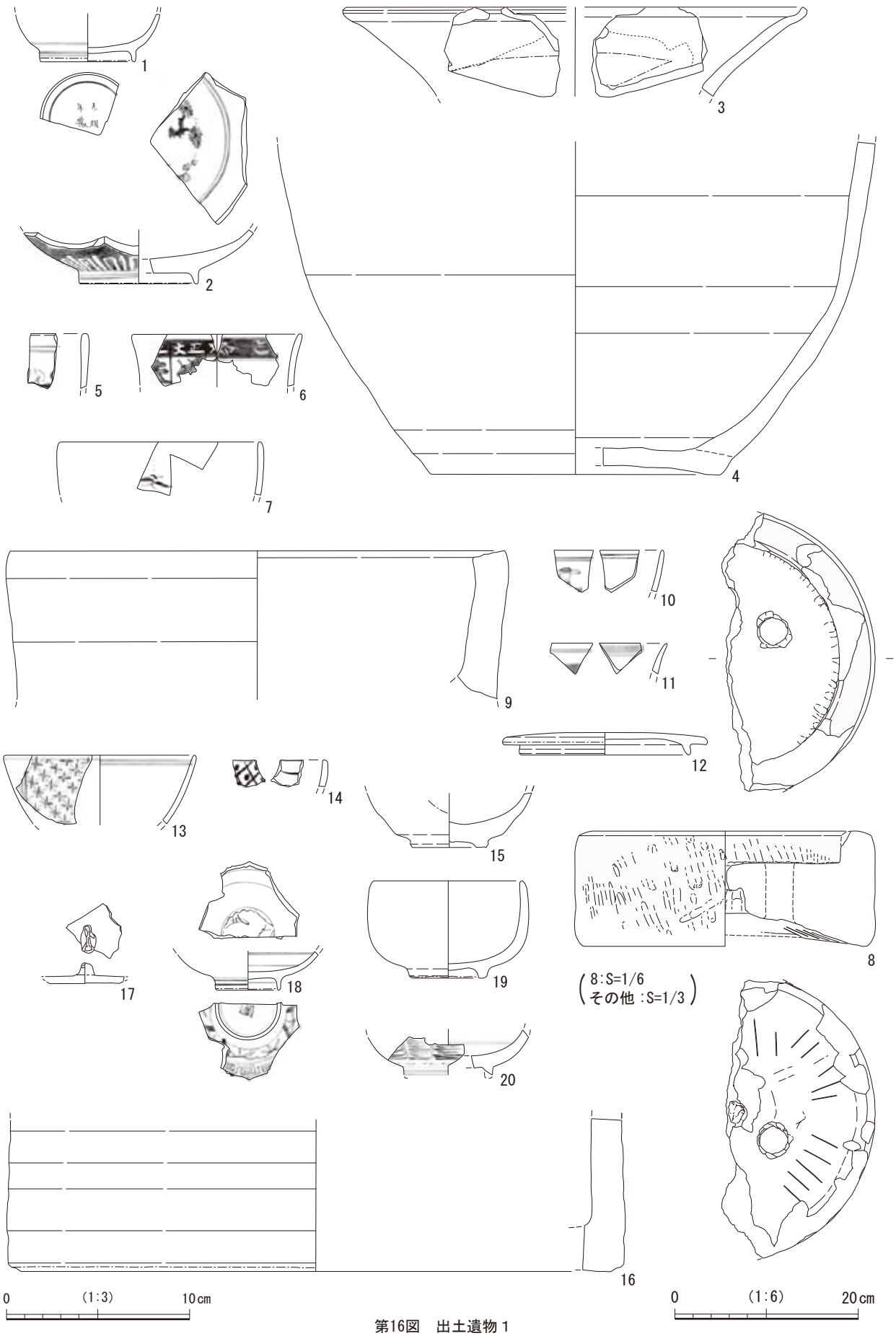
第14図　C区遺構図



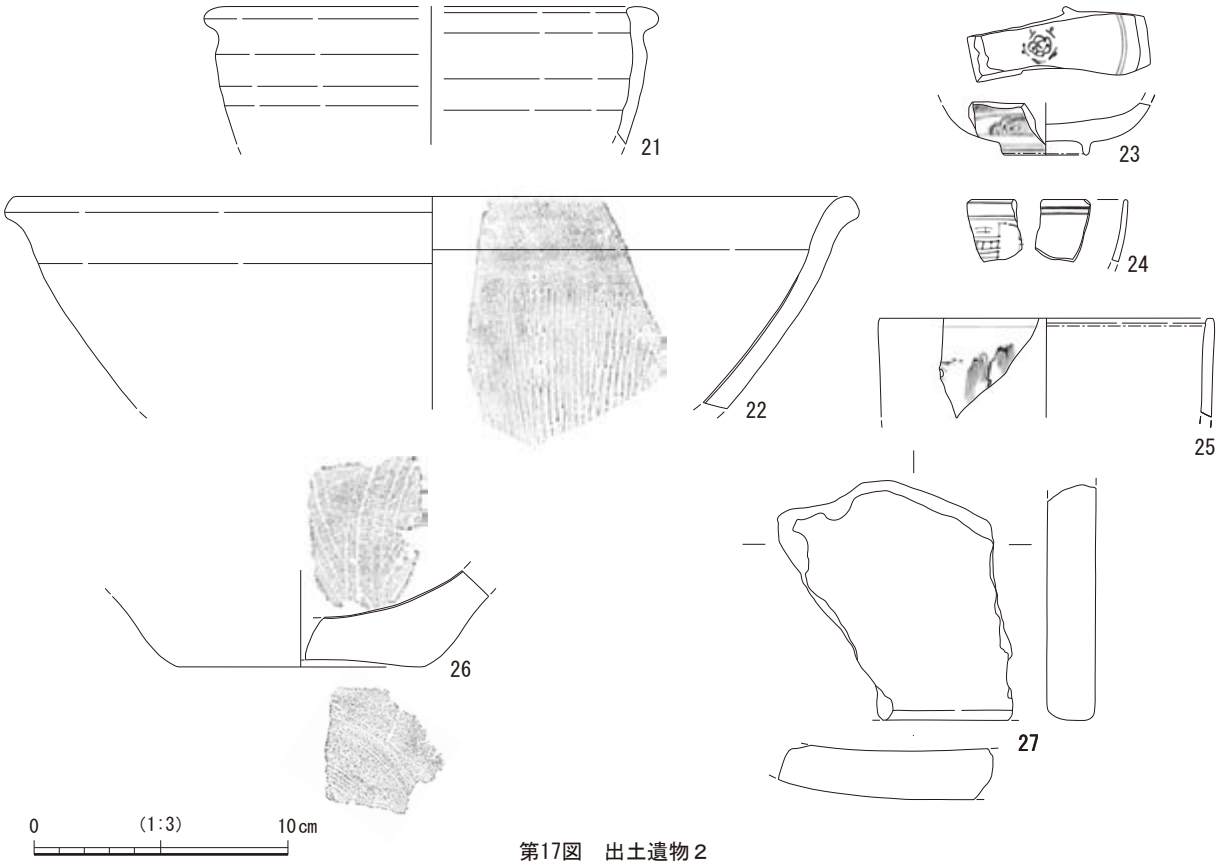
C1 区 旧美大施設基礎（北東から）

A 区 SD1 完掘状況（北から）

第15図　SD1・2・旧美大施設基礎遺構図


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
8:S=1/6
その他 :S=1/3
0
(1:3)
10cm
0
(1:6)
20cm

第16図　出土遺物１



第17図　出土遺物２

第２表　出土遺物観察表

報告番号	出土地区	遺　構	遺物種類	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調(内)	色調(外)	胎土	釉調	備　考	図化番号
1	B	SE1(SK7)	磁器	碗		5.2	(2.6)			白、緻密	透明	18c、肥前、染付、釉薄く均一	3
2	B	SE1(SK7)	磁器	鉢		6.4	(3.0)			灰白、緻密	透明	18c、肥前、染付、漆継ぎ、貫入あり、気泡あり	1
3	B	SE1(SK7)	陶器	鉢	(25.0)		(4.9)	鈍橙	鈍橙	鈍橙、細砂わずか	灰釉	肥前、一次釉灰色、二次釉黄色	2
4	B	SK3	陶器	甕		16.0	(18.4)	鈍赤褐	鈍赤褐	灰黄褐、礫少、粗砂少	鉄釉	底部板状圧痕	4
5	A	SD1	陶器	碗			(3.1)	オリーブ灰	オリーブ灰	灰	灰釉	18c、陶胎染付、貫入あり	13
6	A	SD2	磁器	碗	10.0		(3.2)			灰白、緻密	透明	19c、若杉窯、染付、暦手、貫入あり	5
7	A	SD2	磁器	碗	11.0		(3.0)			灰白、堅緻	透明	染付	25
8	A	撹乱坑1	石製品	石臼								重量5.84kg、直径33.0cm 高さ12.7cm 供給口3.0cm くぼみ高さ3.5cm	27
9	C1	撹乱坑7	窯道具	匣鉢	27.2		(8.2)	明黄褐		黄灰、粗い、礫並、粗砂多		外面施釉オリーブ黄	11
10	C2	撹乱坑9	磁器	碗			(2.3)			灰白、堅緻	透明	染付	7
11	C1	撹乱坑10	磁器	碗			(1.7)			灰白、緻密	透明	19c、瀬戸美濃	10
12	C2	撹乱坑12	陶器	蓋	11.3		1.3		灰白	灰白	灰釉	かえり径9.3cm、釉オリーブかかった透明、貫入細い	8
13	C2	撹乱坑12	磁器	碗	10.4		(3.9)			白、緻密	透明	肥前、染付、釉薄く均一	9
14	A	検出面	陶器	不明			(1.5)	灰白	灰白	灰白	透明	鉄絵、貫入あり	23
15	A	C5グリッド検出面	陶器	碗		4.0	(3.0)	灰黄	鈍橙	鈍橙	灰釉	17c前、肥前、貫入あり、内面気泡あり	6
16	C2	E2グリッド 4トレンチC底	窯道具	匣鉢		33.8	(8.4)	鈍赤褐	鈍赤褐	鈍褐、礫並、粗砂多	鉄釉		12
17	文化財課試掘	歴博リニューアルNo18	陶器	蓋			(1.2)	灰白	灰白	浅黄		水注蓋?釉不透明、灰白、貫入あり	26
18	文化財課試掘	歴博リニューアルNo18	磁器	碗		3.5	(2.2)			灰白、堅緻	透明	19c、染付	16
19	文化財課試掘	歴博リニューアルNo18	磁器	碗	8.0	4.3	5.4	オリーブ灰	オリーブ灰	灰、やや粗い	透明	釉ｵﾘｰﾌﾞ灰、貫入あり	18
20	文化財課試掘	歴博リニューアルNo18	磁器	碗		(5.0)	(2.5)			白、緻密	透明	染付、釉薄く均一	17
21	文化財課試掘	歴博リニューアルNo18	陶器	鉢	(18.0)		(5.5)	淡黄	淡黄	灰白	灰釉	貫入あり、口縁一部緑色	15
22	文化財課試掘	歴博リニューアルNo18	陶器	擂鉢	33.0		(8.5)	鈍赤褐	鈍赤褐	橙、砂粒僅かに含む	鉄釉	肥前、おろし目単位9～10条か	14
24	文化財課工事立会	歴博第1～2棟間ボックスカルバート	磁器	碗		3.2	(2.1)			灰白、緻密	透明	染付	20
25	文化財課工事立会	歴博第1～2棟間ボックスカルバート	磁器	碗			(2.5)			灰白、堅緻	透明	染付	22
26	文化財課工事立会	歴博第1～2棟間ボックスカルバート	磁器	蓋物or段重	13.2		(4.0)			灰白、緻密	透明	染付	21
27	文化財課工事立会	歴博第1～2棟間ボックスカルバート	陶器	擂鉢		10.0	(3.9)	鈍橙	鈍橙	粗砂少、細砂少		おろし目単位6条か	24
28	文化財課工事立会	歴博第1～2棟間ボックスカルバート	いぶし瓦	平瓦						灰白		最大長(9.6)cm、最大幅(9.4)cm、厚1.9cm	19

SK2（第６･13図）　C2区南東部に位置する。平面形は不整楕円形で、長径2.83m、短径2.45m、深さ72㎝。内部で直径1.49mの不整円形の凹みをなす。遺物は伴わない。

SK3（第６･13図）　Ｂ区西隅で調査区壁に接する。全形は判断しがたいが、比較的直線的に伸びる東辺は長さ3.29m以上、角は隅丸方形状をなし、短辺は1.77m以上、断面皿形で深さ41.0㎝を測る。底面で第16図４の越前焼甕が正位で出土した。ここに据えられていた可能性がある。

SK4（第６･13図）　Ｂ区南東部に位置する。平面形は隅丸略長方形で、長径1.0m、短径84㎝、深さ18㎝を測る。遺物は出土していない。

SK5（第６･13図）　Ｂ区南東部に位置する。平面形は不整円形で、直径1.1m、深さ18㎝を測る。内部で北東－南西の深い溝と、北西－南東の浅い溝が交差しており、木杭等を十字に組み合わせた遺構とみられる。遺物は出土していない。

SK6（第６･13図）　Ｂ区中程に位置する。平面形は比較的端正な円形で、直径76㎝、深さ44㎝、地山にしっかり掘り込まれる。遺物は出土していない。

SD1（第６･15図）　Ａ区南東部でSA1･2と長軸方位を同じくする。長さ12m以上、幅60㎝、深さ７～10㎝と浅い。第16図５の18世紀代の磁器碗や瓦、木片が出土している。

SD2（第６･15図）　Ａ区南西部でSA3やSB1桁に直交気味に位置する。長さ9.6m、幅69～81㎝、深さは７㎝と浅い。第16図６は碗の内外面に染付で歴註等を配した暦手碗で、再興九谷窯の一つ、小松市所在の若杉窯の製品である。外面には墨弾きで「二　大正　大」とあり「二」の下には「未」､「大正」の下には牛の図柄が描かれる。内面には「百　三」と年間日数（例えば「日四十五百三」）の一部が記される。『日本暦日便覧』にこの歴註を付き合わせると、当品には文政７（1824）年あるいは文政８年の暦が写されていると想定される。製作年代はその前年であり、貴重な紀年銘資料である。

旧金沢美術工芸大学施設基礎（第６･15図）　Ｃ区では各所で建物撤去時にレンガやコンクリート片などの廃材を埋めた撹乱（特に土坑状をなすものについて撹乱７～14と呼称）が存在したが、C1区西側の４トレンチCの底で、この場所にかつて存在した「工芸デザイン実験棟」に関わる建物基礎とみられる遺構が遺っていた。栗石上にコンクリートを敷きその上にレンガを重ねたもので、平面で縦1.83×横1.1m以上のＬ字形配置をなし建物角とみられる。地表からレンガ上面までは70㎝、レンガ積み部分の高さは85㎝、コンクリート･栗石厚は27㎝を測る。

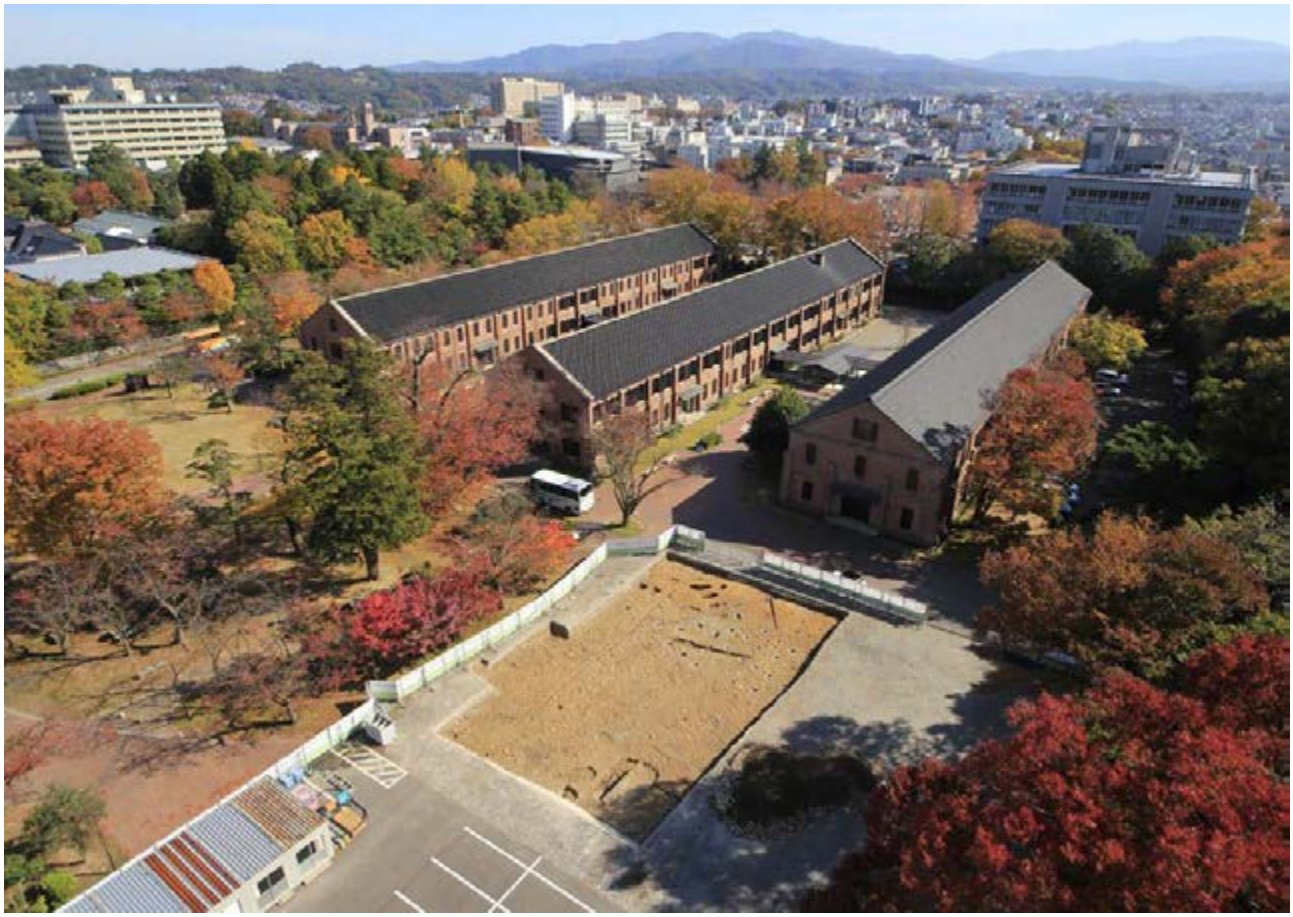
その他遺物（第16･17図）　８～13は撹乱出土品である。11は19世紀代の瀬戸美濃碗、15は17世紀前半代の肥前碗で、出土品中最も古い時期の所産である。９･16の匣鉢は美術工芸大学時代の陶芸に係る遺物である。17～28は調査箇所の南東に位置する県立歴史博物館周囲の各種工事に係り実施された県文化財課による試掘及び工事立ち会い時の出土品である。

第３節　ま　と　め

小立野丘陵の北西端を占めた加賀藩筆頭家老本多家上屋敷の調査である。上屋敷は、丘陵下に下る「美術の小径」（第１図）がある谷を境に、御殿空間であった南地区（県立美術館周辺）と、土蔵や馬場等が配置された北地区（県立歴史博物館西側）に大きく分けられるが、今回の調査地は北地区の南東端、隣の篠原家屋敷に接した場所にあたる。一帯には明治に入り陸軍練兵場や兵器支廠が置かれており、調査区各所の土層断面からは、その設置に伴い大幅な削平･整地を行った事が窺われた。また、近世以降の撹乱も多く認められた。削平･撹乱が多い中で調査の結果、掘立柱建物１棟や塀･柵３基、井戸１基、溝、小規模な土坑などを確認した。検出遺構については、上に挙げた馬場等に関わる施設の可能性が指摘される。出土遺物は極少ないが、18世紀以降を主に、17世紀前半のものも認められた。

調査地遠景（北西から）

調査地全景（俯瞰）



A 区 完掘状況（北西から）

A 区 完掘状況 全景（北西から）

A 区 SB1 周辺 完掘状況（南西から）

A 区 完掘状況（俯瞰）

A 区 SB1 P ア土層断面エ（南から）

A 区 SB1 P ウ土層断面エ（南から）

A 区 SB1 P ケ完掘状況（北から）

B 区 SE1(SK7)（北西から）

A 区 SK1 土層断面ウ（東から）

C2 区 SK2 完掘状況（北西から）

B 区 SK3 完掘状況（南西から）

B 区 SK5 完掘状況（南西から）

B 区 SK6 完掘状況（北西から）

A 区 撹乱坑 1 土層断面（西から）

C2 区 完掘状況　全景（北西から）

C1 区　全景（南から）

C1 区 4 トレンチ b 区撹乱 8･10 完掘状況（南西から）

C1 区　旧美大施設基礎（南東から）

A 区 南東壁土層断面 A0 ～ 3m 地点（北西から）

A 区 南東壁土層断面 A15 ～ 17m 地点（北西から）

B 区 南東壁断面 V（北西から）

B 区 南西壁土層断面 W（北東から）

C1 区 2 トレンチ土層断面 H（北東から）

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27

報告書抄録

ふりがな	かなざわし　かなざわじょうかまちいせき（ほんだしやしきあとちく）
書名	金沢市　金沢城下町遺跡（本多氏屋敷跡地区）
副書名	東京国立近代美術館工芸館移転整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	澤辺利明、山内花緒
編集機関	公益財団法人石川県埋蔵文化財センター
所在地	〒920-1336　石川県金沢市中戸町18番地１　TEL（076）229-4477　FAX（076）229-3731
発行機関	石川県教育委員会・公益財団法人石川県埋蔵文化財センター
発行年月日	2020年３月19日

所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯（新）	東経（新）	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		所在地	遺跡番号					
金沢城下町遺跡（かなざわじょうかまちいせき）（本多氏屋敷跡地区（ほんだしやしきあとちく））	石川県金沢市（いしかわけんかなざわし）出羽町（でわまち）地内	172014	130405	36度33分32秒	136度39分42秒	20171016～20171226	1,180㎡	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
金沢城下町遺跡（本多氏屋敷跡地区）	城下町	江戸時代	掘立柱建物、井戸、土坑	陶磁器、石製品	

要約

小立野丘陵の北西端を占めた加賀藩筆頭家老本多家上屋敷の調査である。調査の結果、掘立柱建物１棟や塀･柵３基、井戸１基、小規模な土坑などを確認した。出土遺物は極少ないが18世紀以降を主に、17世紀前半のものも認められた。調査地は上屋敷地北部の土蔵や馬場等が配置された箇所にあたり、検出遺構はそれらに関わる施設の可能性がある。

金沢市
金沢城下町遺跡（本多氏屋敷跡地区）

発行日　令和２(2020)年３月19日

発行者　石川県教育委員会
〒920－8575　石川県金沢市鞍月1丁目1番地
電話　076－225－1842（文化財課）

公益財団法人石川県埋蔵文化財センター
〒920－1336　石川県金沢市中戸町18番地1
電話　076－229－4477
E－mail　daihyou@ishikawa-maibun.or.jp

印刷　前田印刷株式会社